

平成 22 年度

愛知県立芸術大学施設整備ビジョン報告書

---



平成 23 年 3 月

愛知県立芸術大学施設整備ビジョン検討会

はじめに	1
これまでの経緯と審議内容	2
基本方針の策定にあたって	3
1 現キャンパスの評価と継承	4
(1) キーワードの相関関係	5
(2) 現状	6
(3) キャンパスのコア	7
(4) キャンパスのコアを生成する建物群	8
(5) 「間の空間」を生成する建物群	9
(6) 地形と水系	10
2 キャンパスの整備方針	11
3 キャンパス活用の方向性	12
4 今後の施設整備の進め方	13

## [資料]

- 1 既存施設の現状
- 2 キーワードに対する主な委員のコメント
- 3 平成 22 年度調査による植生区分図
- 4 ビジョン検討会委員名簿／審議経過一覧

## はじめに

愛知県立芸術大学（愛知芸大）は、緑に囲まれた長久手の丘陵に、世間の喧騒から離れて芸術を極めるという理想のもとに昭和41年4月に開学しました。

開学以来、学部・大学院の充実を図り、現在、美術学部は美術科（日本画、油画、彫刻、芸術学）とデザイン・工芸科（デザイン、陶磁）の2学科6専攻、音楽学部は音楽科（作曲、声楽、器楽）の1学科3専攻により構成されています。両学部とも平成21年度に大学院博士後期課程を開設し、教育体制の充実が図られました。この間、平成19年度に愛知県公立大学法人（法人）が設立され、法人が設置する大学として新たなスタートを切ることになりました。

大学存在の意義は、教育及び創作・研究の充実にありますが、同時に、つねに社会に開かれたものであることも大切です。40数年の歴史と伝統の上に花開いた、本学の誇るべき成果・可能性などを学内だけにとどめず社会に広め、あるいは社会と協力して、新しいものを作り上げていくことが求められています。このため、芸術文化面で地域に貢献することや海外の大学や研究施設との交流を積極的に進めています。

大学の活動の場であるキャンパスは、主要な建物が開学時の昭和40年代に竣工したもので、老朽化に加え、耐震性能、バリアフリー、遮音・防音性能の不足、学生数の増加による狭隘化、作品の大型化による創作スペース不足など施設面・機能面での問題が顕在化しており、教育研究活動に支障をきたしています。このため、愛知県は、緊急度の高い施設から順次整備していくことを決め、新音楽学部棟の整備に着手しました。

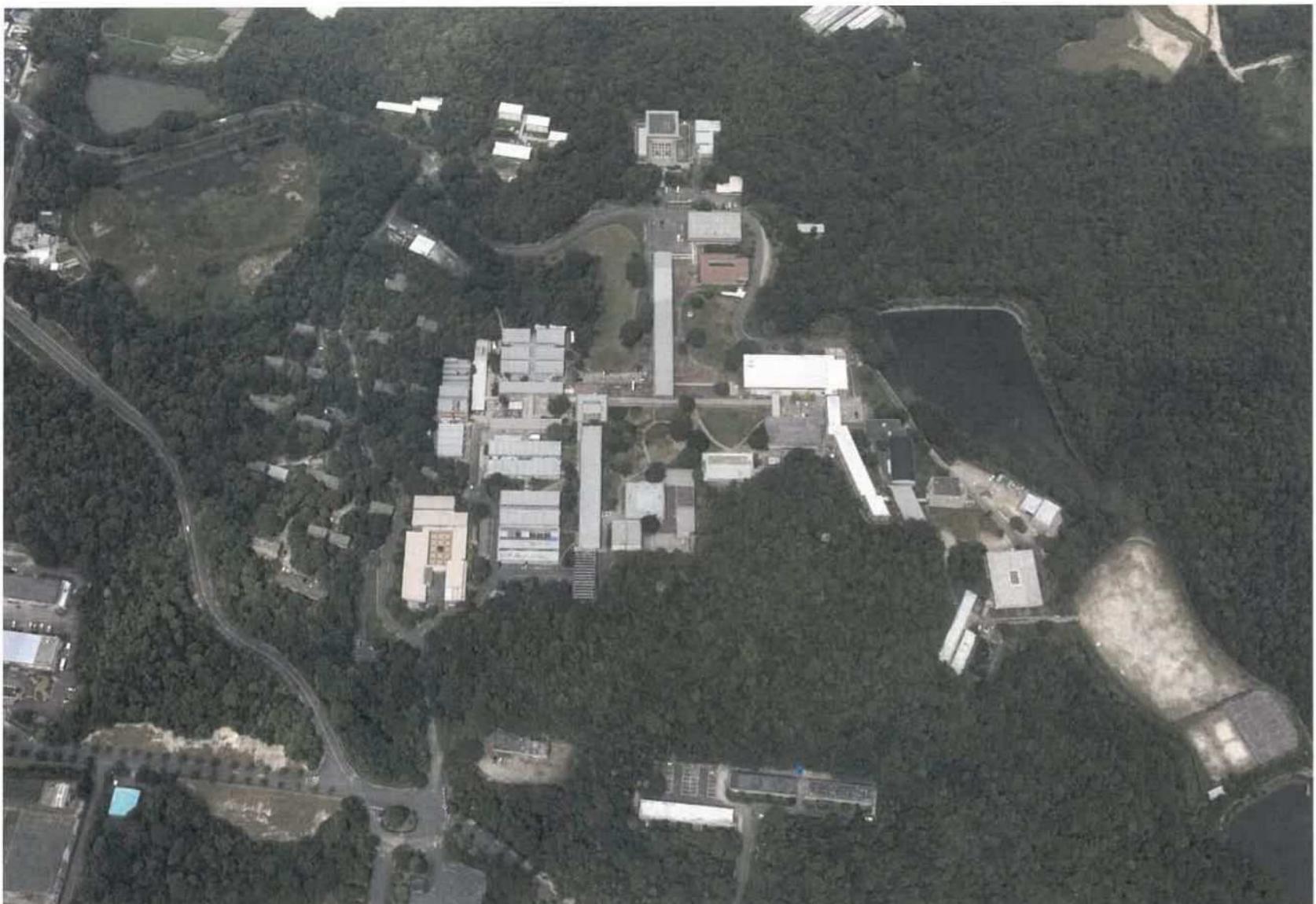
愛知芸大のキャンパスは、日本を代表する建築家である吉村順三氏の設計によるもので、その建築は高く評価されており、キャンパスと建物群がDOCOMOMO Japanの125選のひとつに選定されました。

大学の使命である教育研究機能の充実強化とすばらしいキャンパスの継承・発展を図るために、将来を見据えたキャンパス全体の整備計画の策定が不可欠です。このため、大学関係者だけでなく外部の有識者や学生・卒業生の代表等も交えた「愛知県立芸術大学施設整備ビジョン検討会」（ビジョン検討会）を設置して、検討してきました。

本報告書は、ビジョン検討会での検討結果をまとめたものであり、今後、愛知芸大の整備を進める上で基本方針となるものです。関係する皆様方から愛知芸大の整備についてのご理解をいただき、愛知芸大のますますの発展にご支援賜りますことをお願い申し上げます。

平成23年3月

愛知県立芸術大学施設整備ビジョン検討会座長  
愛知県立芸術大学学長 磯見輝夫



法人化当時（平成19年4月）の写真

### 〈これまでの経緯〉

- 愛知芸大のキャンパスは日本を代表する建築家である吉村順三氏の設計によるモダニズム建築として評価されており、平成 18 年に DOCOMOMO Japan (DOCOMOMO= Documentation and Conservation of buildings, sites and neighbourhoods of the Modern Movement : モダン・ムーブメントにかかわる建物と環境形成の記録調査及び保存のための国際組織) は、愛知芸大のキャンパス及び建物群を「日本におけるモダン・ムーブメントの建築 125 選 (現在は 145 選)」に選定した。
- 愛知芸大は平成 19 年 4 月に法人化された。その際、建物については老朽化による劣化、機能不足が著しいことから、愛知県が整備した上で法人へ出資することになった。
- 平成 19 年度に法人は「2007 年度全体構想」を作成した。この構想は、将来の愛知芸大の施設を考えたキャンパスコンセプト及び必要な機能・面積をまとめたものである。
- 平成 20 年 3 月に法人は「2007 年度全体構想」を県に提出し整備を要望したが、当時の財政状況等から県はこれを認めず、緊急度の高い施設から順次整備をしていく方針を定めて音楽学部棟の整備を決定し、平成 21 年度から基本設計などの準備を進めてきた。
- 平成 22 年 7 月に、質の高い教育・研究の推進、将来の更なる発展を目指し、幅広い意見を聞きながら愛知芸大の施設整備のビジョンを検討するため、愛知芸大に「愛知県立芸術大学施設整備ビジョン検討会」を設置した。
- ビジョン検討会は、平成 22 年 7 月に第 1 回を開催し、その後、平成 23 年 3 月までに計 12 回開催し検討が行われた。

### 〈審議内容〉

#### 1 施設整備のコンセプト

愛知芸大のコンセプト「愛・知・芸術の森」を確認するとともに、整備の観点として、〈教育・研究〉、〈生活〉、〈連携〉、〈国際化〉、〈環境〉の 5 つの項目を確認した。

#### 2 新音楽学部棟の整備

現在の音楽学部棟の問題点と音楽施設としての改修の可能性を検討したが、①芸術大学の音楽教育施設に求められる教育環境を満たしていない、②改修して音楽学部の教育施設として使用することは困難である、③建物あるいは敷地は他の用途での利活用を検討していく、④ビジョン検討会としての改善点・留意点等のアドバイスを平成 22 年度の実施設計で検討していくこととなり、建設場所については、楽器の運搬上、現奏楽堂に近いことや現在の音楽学部棟の教育研究に工事の騒音が影響しないことなどから、新しい音楽学部棟を基本設計に沿って整備していくことに合意した。

#### 3 現キャンパスの評価

愛知芸大の設計者である吉村順三氏らが編集した『空間の生成 愛知芸大のキャンパス』(SD別冊) 等からキーワードを抽出するとともに、部会の検討を踏まえて新たなキーワードを追加し、「間の空間」や「建物配置」、「軸線」といった設計思想を明らかにした。  
また、キーワードについて委員が意見や評価を行うとともに、キーワードを現況写真で確認しながら、キャンパス図面で表現した。

#### 4 キャンパス整備の方向性

キャンパスの中心となる広場（コア）とそれを囲むように配置されている建物群については原則改修していくこととし、原設計者の意図を尊重しながらどの方向に拡張していく余地があるのかを検討した。

#### 5 キャンパスの整備方針

現キャンパスの評価を踏まえ、キャンパスや建物を整備していくため、「基本方針」、「整備方針」及び「保全方針」を検討した。

愛知芸大は、美術と音楽の2つの学部を持ち、芸術の教育研究を目的としている大学として、その目的を達成するのに必要な施設や機能を備えていなければならない。開学から44年が経過し、建物全体に経年劣化が見られるほか、学生数の増加による狭隘化、防音性能等の著しい機能劣化など、教育研究活動に支障をきたしている。これまで小規模な補修や修繕が行われてきたが、抜本的な改修や計画的な整備は行われてこなかった。

教育研究活動を行う環境を整備するにあたっては、機能以外の価値もまた重視されるべきである。愛知芸大において機能以外の価値とは、この建物群が日本の近代建築史上で重要な位置づけがなされているということだけではなく、このキャンパスが愛知芸大の歴史そのものであり、アイデンティティの依り所に他ならないという事実がもたらす価値のことである。この価値を引き継ぐことと、必要な機能更新との両立を目指すことは簡単ではないが、その文化的意義は大きい。従って現キャンパスの建物群を可能な限り存続させる方針でこの問題に取組み、愛知芸大の施設整備が「環境が人を育み、人が環境を育む」模範的な例となるようその理想を追求する。

のために、様々な立場の専門家の意見をもとに、このキャンパスを整備していくにあたってどのようにアイデンティティを守っていくべきであるか、また、その上で教育研究活動に必要な機能を確保していくためにはどのような整備をしていくべきか検討を行った。その結果、ビジョン検討会での共通した認識として右の3つの項目を基本方針とした。

## 基本方針

- 1 大学の教育研究活動の推進に貢献する環境づくりに努める。**
- 2 教育研究活動の高度化・多様化・国際化など、大学の発展に対応できる環境とする。**
- 3 自然環境に配慮するとともに、価値あるキャンパスや建物群のあり方を継承し、  
地域に開かれた大学とする。**

## 1 現キャンパスの評価と継承

一般に、環境が何らかの必要な変化を受け入れなければならず、その変化によって環境が既に有していた優れた要素を失わないよう努力するには、まず「この環境の何が優れているのか、それは私たちにとってどのような価値があるか」という問い合わせに答え、それらを共有していかなければならない。現キャンパスには、改善すべき点があると同時に、評価し継承すべき内容がある。改善すべき点とは主に安全性、機能性、空間量に関するものであり、建物毎にその利用目的と時代性に応じて仔細に設定されなければならない。一方、評価し継承すべき内容とは、建物毎の利用目的や時代性の推移に対してむしろ変化しないもの、守られるべき事柄に関するものである。ビジョン検討会では、現キャンパスにおける評価し継承すべき内容を明らかにし、その結果を誰もが共有できるようにする必要があると判断した。

まず、キャンパスの構成やオープンスペース、建物の配置、ボリュームやプロポーションが全体にどのように貢献しているかといった全体性から見てゆく必要がある。これらは建物毎の評価からは導くことが出来ない。そこでまず原設計者がどのような意図や計画性をもってこれら全体を扱ったのかを、原設計者自身が記した文献資料を元に分析することとした。その方法として、文献資料からキーワードを抽出し、それらの相関関係を図化することによって、現設計者が意図した全体性とその構造を明らかにし、その内容を共有できるようにした。

次に、この全体性の観点から、現在のキャンパスをとらえ直してみると、建物を評価の視点の異なる3つのグループに分けることができた。

### ■ キーワードの抽出

原設計者による文献資料（吉村順三ほか編『空間の生成 愛知芸大のキャンパス（SD別冊）』鹿島研究所出版会、1971年）を分析対象とし、現キャンパスの特徴や全体性の構築をする上で重要と思われる言葉を整理した上で、現キャンパスにおいて確認可能かどうか、相関関係を説明する上で不可欠かどうかを精査しながら、最終的に13のキーワードを抽出した。

- 丘・建物・大空・緑
- 規模算定
- 視線・軸線
- 地形
- 全体性・全体へのつながり
- 光・空気・音
- ブロック配置
- 透き通し・重ね合わせ
- 分棟
- やせた形
- 間の空間
- 広場
- 地域に開かれた大学

### ■ キーワードの相関関係

抽出したキーワードは、それぞれ個別の意味を有していると同時に、キーワード同士が必然性を伴って連動し全体性の構築に貢献しているため、キーワードの相関関係を表す図を作成した（5頁、「(1) キーワードの相関関係」）。これによって、守られるべきキャンパスの骨格やその解釈の共有が可能になり、既存施設の改修だけでなく、新たな施設拡張の際にも有効な方向性や留意点を読み取ることが可能になった。

### ■ 評価の視点の異なる3つのグループ

キーワードの相関関係から全体性の構造が明らかになった。この観点から現キャンパスの建物群を見てみると、大きく次の3つに分類されることがわかった。

- ① キャンパスの中心となるコアを生成する建物群  
(7頁「(3) キャンパスのコア」、8頁「(4) キャンパスのコアを生成する建物群」)
- ② コアに接続され間の空間のネットワークを生成する建物群  
(9頁「(5) 「間の空間」を生成する建物群」)
- ③ コアや間の空間のネットワークのいずれにも関係しない他の建物群

## (1) キーワードの相関関係

この図は、現キャンパスを評価する一環として、原設計者が設計・施工時に示した考え(キーワード)がキャンパスの現状にどのように反映されているかを示しながら、そこに、現キャンパスを読み解くために各委員が示したキーワードを重ね合わせ、すべてのキーワードの関係を図示したものである。

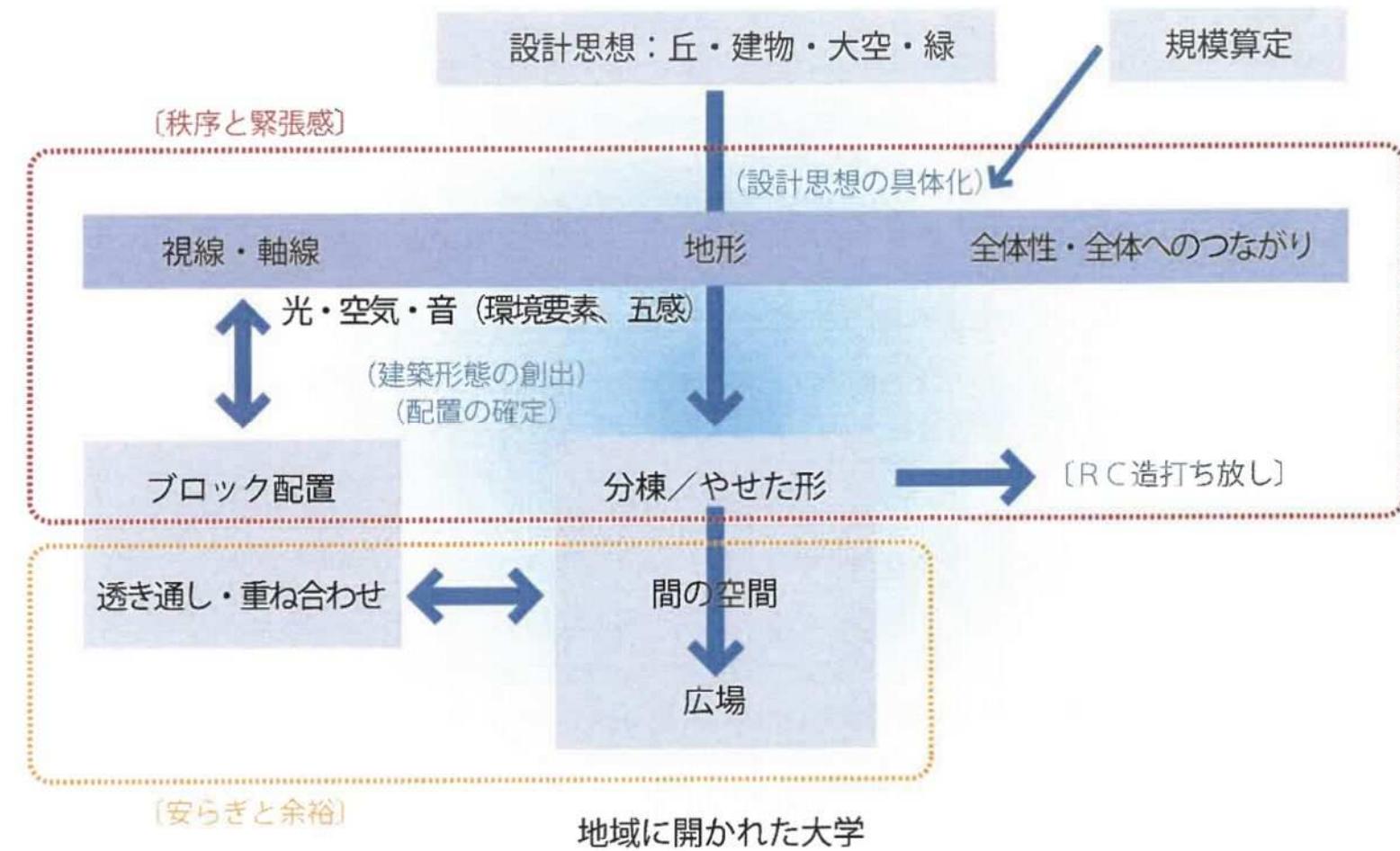
最上段に示した「設計思想」とは、キャンパス全体の設計と個々の建物の設計を貫く基本的な考え方である。まず、設計の前提条件として「丘の上」という地形に対する原設計者の解釈がある。原設計者は、「丘の上の理想的なキャンパスとは」という命題・課題を示し、その解として「建物をラビリンスの様な人為的な一つの塊りとせず、明るくダイナミックに丘の上に散開」「大空や緑に共鳴」と語っているが、これは、丘・建物・大空・緑が一体となって存在することの重要性を示している。そこから導き出される現キャンパスへの対応策は、これら四要素の確保であり、具体的には、丘を削らない、谷を埋めない、建物を維持する、天空の確保、緑を減らさない、ことである。

次に、「設計思想の具体化」では、「規模算定」を考えながら、「視線と軸線」「地形」「全体性・全体へのつながり」を基に個々の建物の設計とそれらの配置を決めていく。その際、「光・空気・音」という環境要素、あるいは、人間が五感で認識する要素を考慮しながら、設計を進めている。まず、地形を考慮して出てくる解は、建物を「分棟」とすることであり、分棟とした建物をそれぞれの機能に応じてまとまりをつくる「ブロック配置」をとることでキャンパスの「秩序」を確保した。また、分棟になることによって、「間の空間」が生まれ、その最大の場所が「広場」になっている。さらに、ブロック配置において、間の空間から建物を見ると、そこでは建物の「透き通し」「重ね合わせ」がおこなわれている。

また、個々の建物は「やせた形」として表現される低層の鉄筋コンクリート(RC)造打ち放しの建物であり、形態の多様さはあるものの、すべての建物を低層のRC造打ち放しとしたこともキャンパスの秩序を確保することに役立っている。

キャンパス全体は、「地域に開かれた大学」として、「堀が無い、門が無い」という具体的な方法を通して、それを確保しており、図に枠を描いていないのは、それを示すためである。

なお、「光・空気・音」は、「秩序と緊張感」にも「安らぎと余裕」の両方に関係するものだが、ここでは、「設計思想の具体化」に影響を与える前提で、図上の場所とした。また、DOCOMOMO Japan は、「RC 造打ち放し」「秩序と緊張感」「安らぎと余裕」というキーワードを用いて、現キャンパスと建物を評価しているので、それらを図に入れた。



注) 黒字:「現キャンパスの評価」キーワード  
 ( ) : Docomomo Japan 作成文書で示された評価要点  
 ( ) : 補足語句

## (2) 現状

これはキャンパスの現在の建物配置図である。昭和40年から45年つまり、吉村順三氏の設計による開学時の建物と、それ以後に増築、新築された建物が混在している。南北にのびる尾根筋に広場があり、その中心に講義棟がある。他の建物は広場を囲むように一定の距離を置いている。講義棟は外来者がアプローチの坂道を上がりながら最初に見えてくる建物であると同時に、キャンパスのどの場所からも見え、常に中心を意識させるランドマークである。

昭和 60 年以降建てられた建物は、新講義棟以外はすべて外側に向かって配置されている。新講義棟は視界を妨げないよう半分地下に埋まっており、従って広場を中心とした景観は開学当時のまま変化していないと思われる。広場の東側に位置する音楽学部は勾配の急な斜面地にあり、等高線に沿って斜めに延びている。西側に位置する美術学部の敷地は比較的平坦で、北側採光の屋根形状から積層しにくい平屋のアトリエ群を配置するには都合が良かったということであろう。また、昭和 60 年以降に追加された建物には、開学時の建築意匠の表層的継承が認められるものと、認められないものに大別できる。しかし、表層的な関連性はあっても、「間の空間」「全体性へのつながり」「透き通し・重ね合わせ」との整合性が乏しい建物があることもわかつってきた。重要なことは、表層的な統一感よりキーワードが示すような骨格となっている空間やそのつながり方であろう。

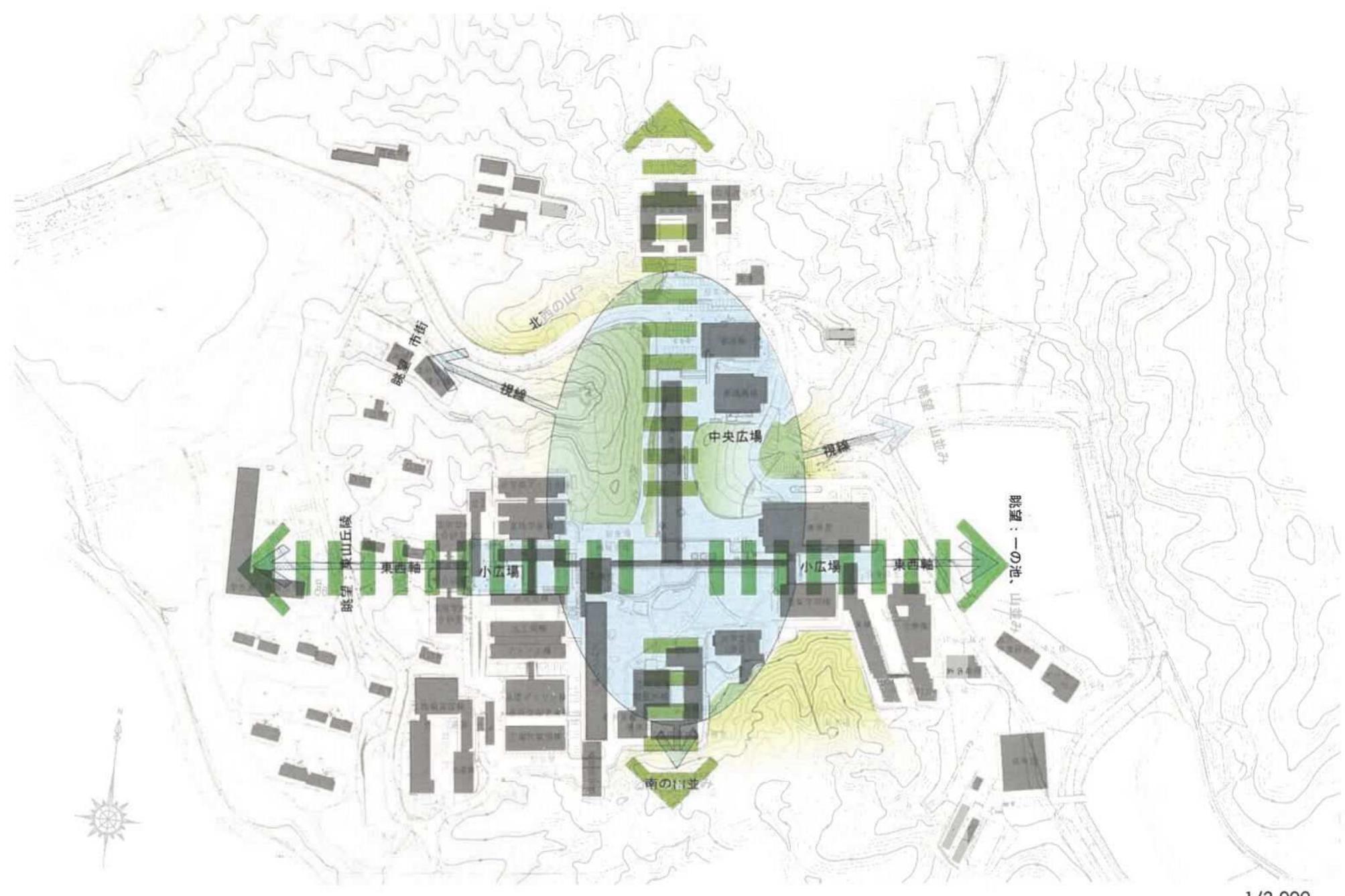


 キャンパスのコア

### (3) キャンパスのコア

文献資料から抽出したキーワードが集中するのが中央の広場である。そのことからこの広場がキャンパスを設計する上で最も重視された場所であることがわかる。現状においてもその意図は見事に具現化され、今日においてもそれが有効であることがよくわかる。

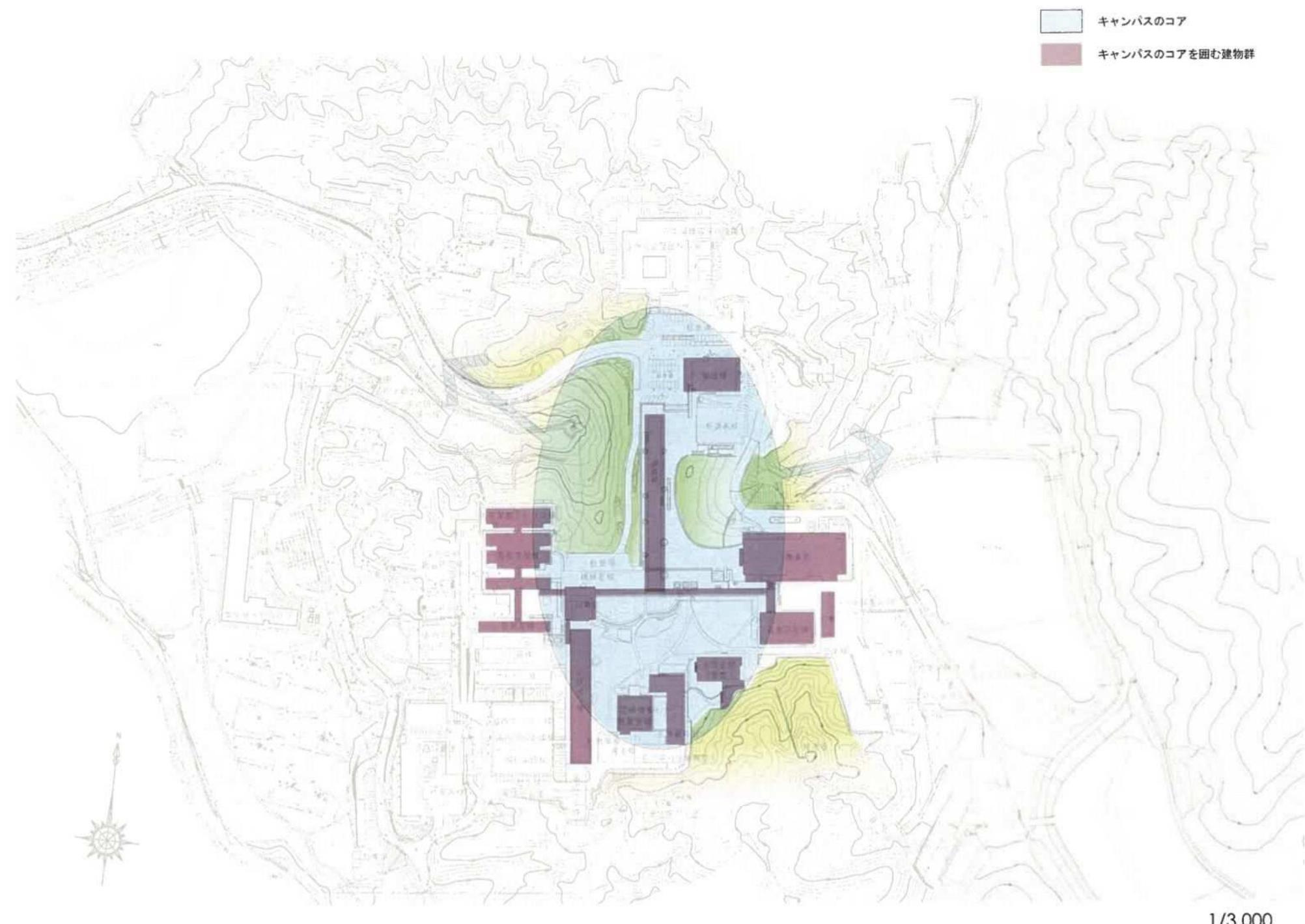
広場は、丘の中心であり、最も空の広がりを感じ、周囲の緑を見渡せ、地形がダイナミックに変化し、風が吹き抜ける場所である。遠い眺望があると同時に、隣接する建物が透け、人々の活動の景色が重なり合う。音楽学部、美術学部のそれぞれに分散した建物と間の空間を束ねる中心的存在である。キーワードの相関図においても「間の空間」の果てに広場があるとしている。音楽と美術（東西）、大学管理と学生自治（南北）、外来者と大学関係者、すべての軸がこの広場に集まって交わるターミナルになっている。これを「キャンパスのコア」と呼び、キャンパスの最も重要な場所とした。

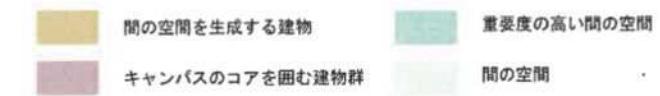


#### (4) キャンパスのコアを生成する建物群

無限に広がっていこうとする奔放な空間を、押しとどめ、規定しようとする建物群によって、中央の広場は人が感じることの出来る一定の大きさを手に入れている。これら広場を規定する建物群は、それぞれが適切な規模と固有の構造形式、意匠的な特徴を備えていて単調になっていない。また、同一面に並ばず雁行し、間を置きながら適度な抜けや透明性をもって囲んでいる。この多孔質な囲みによって、広場は停滞感や閉塞感には陥らず、のびのびした感じが維持されている。

このように建物の表層、ボリューム、配置、高さ方向のバランス等は、オープンスペースの質に重要な影響を与えていくものと思われる。図の着色された建物群は現在の広場を直接支えている。広場と同様、これらの建物群の表層、ボリューム、配置、高さ方向のバランスに関して変更を伴うような変化はなるべく避けるよう配慮すべきである。

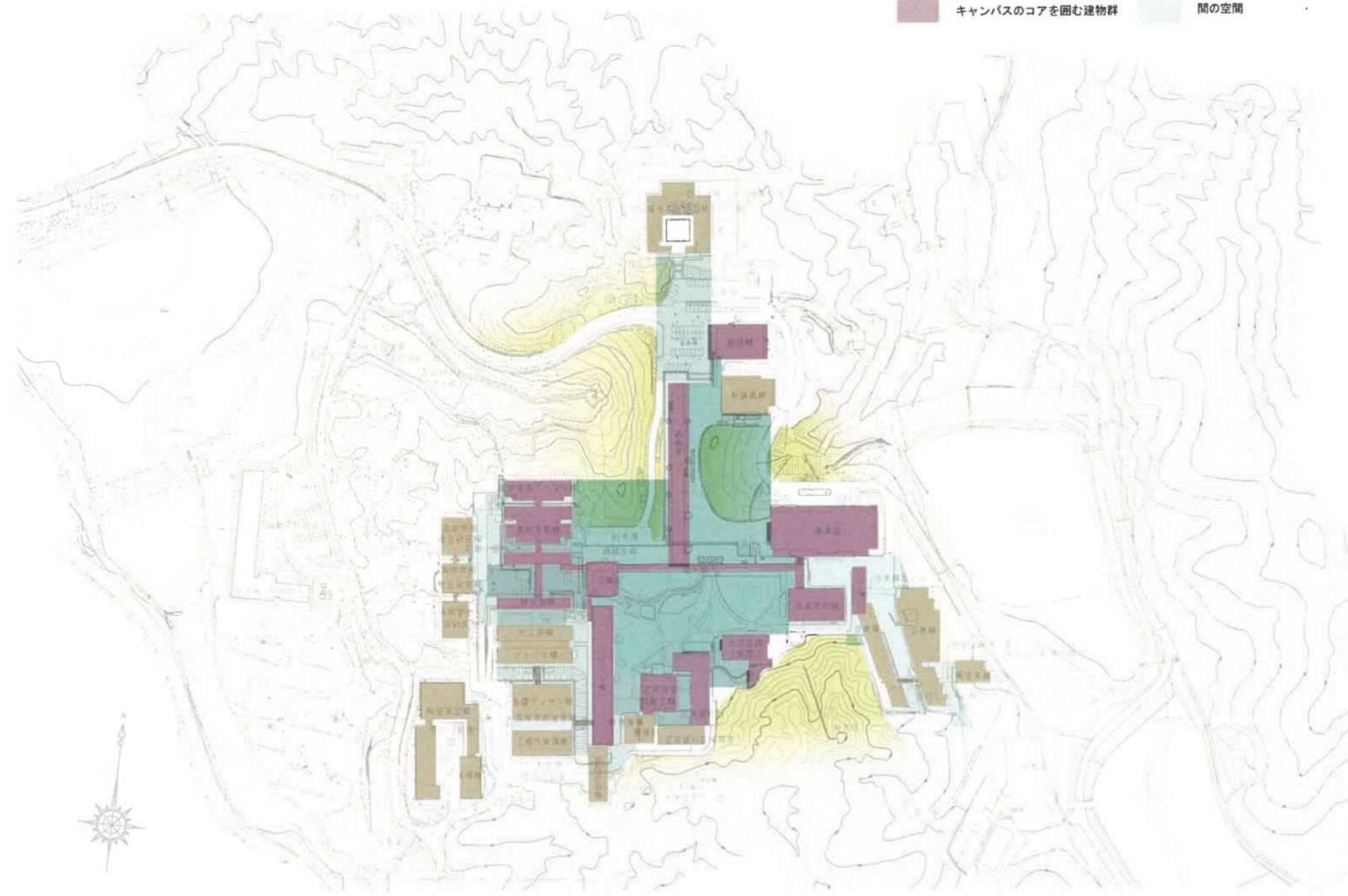




#### (5) 「間の空間」を生成する建物群

「間の空間」は、分棟によって機能毎に別棟になった建物と建物の間に出来るオープンスペースのこと、建物とは対比的に機能と直接関連づけられていない。書において、墨の黒と紙の白との双方のバランスで美が見出されるように、機能によって無駄を省きやせた形となる建物と、何にも縛られない自由を与える「間の空間」を平等に扱おうとしたところが素晴らしい。中央の広場も両学部に分散する小さな空間も同様に親密でやさしい感じがあるのは、原設計者が住宅設計を最も得意としていたからかもしれない。それらはネットワークを形成しており、狭い小さな空間も、広い雄大な広場とつながることで呼吸をしているように思われる。

音楽と美術の東西をつなげる軸には広場に次ぐキーワードの充実がある。学部間交流の軸でありプロムナードになっている。この軸は、今後も継承発展されるべきであろう。また、後から建てられた建物には、せっかくの中庭がありながら、このような「間の空間」のネットワークに接続されていないものもある。新たな「間の空間」を創造するときには、こうしたネットワークにつながるということが非常に重要であると言える。



## (6) 地形と水系

愛知芸大のキャンパスは、名古屋市の東部丘陵に位置し、東と南に標高 140m 程度の山に囲まれ、2つの水系に挟まれている。ここは、およそ 300 万年から 500 万年前、東海湖とよばれた湖の底であった。堆積した粘土と砂礫が互層になっており、山の頂から河原にあるような丸い石がいくらも出てくる。礫層は水を良く通すが、粘土層は水を通しにくい。そのため、山の斜面の中程から突如水が滲み出てくることがある。こうした場所には、表土を失い一年中湿った貧栄養湿地となり特異な生態系パッチを形成する。これらは非常に不安定で、自然状態においても突如水の流れが変化し、生態系パッチが絶滅することもある。今後、新しい施設の建設用地を選定する際には、そのような生態系への影響を考慮する必要がある。

2つの水系はキャンパスの東西にそれぞれ南から北に向かう。東側は水量があり、ため池も枯れない。西側は水量が乏しく、かつて治助トンネルと呼ばれる連通管によって東の水系から西の水系に水が供給されていた。西の水系にある長鶴池の、水を満々と蓄えていた写真があるのはこのためらしいが、そのトンネルもやがて崩落し、現在は、水は流れていよいである。長鶴池は本来の水域にふさわしい小さな池になったが、かつて水のあった場所は現在湿生の草地となり、多様な生物の生息地になっていると思われる。また、平安時代の古窯跡が多く発見されることからもわかるように、この辺りの森には古くから人が関与していた。樹木は燃料として切られ、一方で治山の為に植林もされたという。かつては繰り返し人の手によって干渉されてきた森だったということが言えよう。



## 2 キャンパスの整備方針

現キャンパスを評価した結果、右のとおり「キャンパスの整備方針」を決定した。これは、愛知芸大の教育研究活動の充実強化や今後発展していくために必要な整備の方向性、また、価値あるキャンパスや建物群を継承していくための方針を定めたものである。

「基本方針」でビジョン検討会において議論された共通認識を掲げ、その具体的な内容を「観点」に示した。「整備方針」で現キャンパスの評価から明らかになった「キャンパスのコア」やそれを囲む建物の重要性を考慮しながら、教育研究活動の充実を図っていくためにはどのような手法で整備していくべきかを提示した。さらに、建物だけでなくキャンパス全体を保全していくための方法を「保全方針」としてまとめた。開学から40年以上を経過する中で新しい専攻やより高度な研究を行う大学院博士課程を設置するなど、大学そのものが成長している。キャンパスの保全を考えるときには、適宜その利用形態を見直しながら、生き生きとしたキャンパスづくりを継続的に行っていくことが必要である。

## キャンパスの整備方針

### I 基本方針について

教育研究施設として、安全面・機能面で支障のある施設の改善が急務である。高度化・多様化する教育研究活動に対応し、さらに、全国的・国際的な芸術文化創造の拠点として発展していくためには、施設の充実を図り大学の機能強化を展望した整備が必要である。整備に当たっては、自然環境やキャンパス・建物群の評価を尊重する。

#### [基本方針]

- 1 大学の教育研究活動の推進に貢献する環境づくりに努める。
- 2 教育研究活動の高度化・多様化・国際化など、大学の発展に対応できる環境とする。
- 3 自然環境に配慮するとともに、価値あるキャンパスや建物群のあり方を継承し、地域に開かれた大学とする。

#### [観点]

##### 〈教育・研究〉

- ・個人指導を主体とする実技教育を重視した環境を創出する。
- ・表現方法の多様化や芸術領域の広がりに対応する。
- ・美術と音楽の融合を育む施設として整備する。
- ・世界で活躍する芸術家の育成にふさわしい整備を行う。

##### 〈生活〉

- ・学生、教員の対話が弾む憩いの場を創出する。
- ・自由な広場と遠くまで見渡せる眺望を確保する。
- ・自然条件を活かし、芸術文化の向上に資するいきいきとした楽しいキャンパスを創造する。

##### 〈拠点〉

- ・中部地域の芸術の発信拠点とする。
- ・愛知芸大らしい芸術領域を展開する。
- ・世界とつながった国際的な芸術教育機関へ発展させる。

##### 〈地域連携〉

- ・地域の人々や地域産業との交流、連携を促進する。
- ・キャンパス内の各施設へのアクセスや駐車場を確保する。
- ・野外で芸術を鑑賞できる公園のようなオアシスづくりを目指す。

##### 〈建物配置〉

- ・軸線により秩序を与え、全体のつながりを確保する。
- ・個々の建物の特性を保ち、互いに適切な距離を維持する。
- ・透き通しにより視線を確保する。

##### 〈空間〉

- ・建物の間につくられる「間の空間」を通路で連結する。
- ・「間の空間」から広場への展開を図る。
- ・休憩場所や交流の場としての空間を創出する。

##### 〈自然〉

- ・建物、広場、道路は地形や自然環境に調和させる。
- ・豊かな自然を積極的に活用する。

### II 建物の整備方針について

老朽化の進む建物については、耐震調査や鉄筋コンクリートの性能評価の結果を踏まえ、改修の可能性と教育研究施設としての必要な機能面の改善の可能性を検討し、改修、増築、改築・新築の別を検討する。

#### [整備方針]

- 1 キャンパスのコアを囲む建物群は改修を原則とし、適宜、用途変更して活用する。
- 2 機能・面積が不足する場合は、キャンパスの景観と自然環境に配慮し、増築や改築・新築する。
- 3 整備にあたっては、耐震性能の確保とバリアフリー化を図る。

### III キャンパスの保全方針について

豊かな自然とキャンパス・建物群を継承し発展していくため、キャンパスの保全に努める。

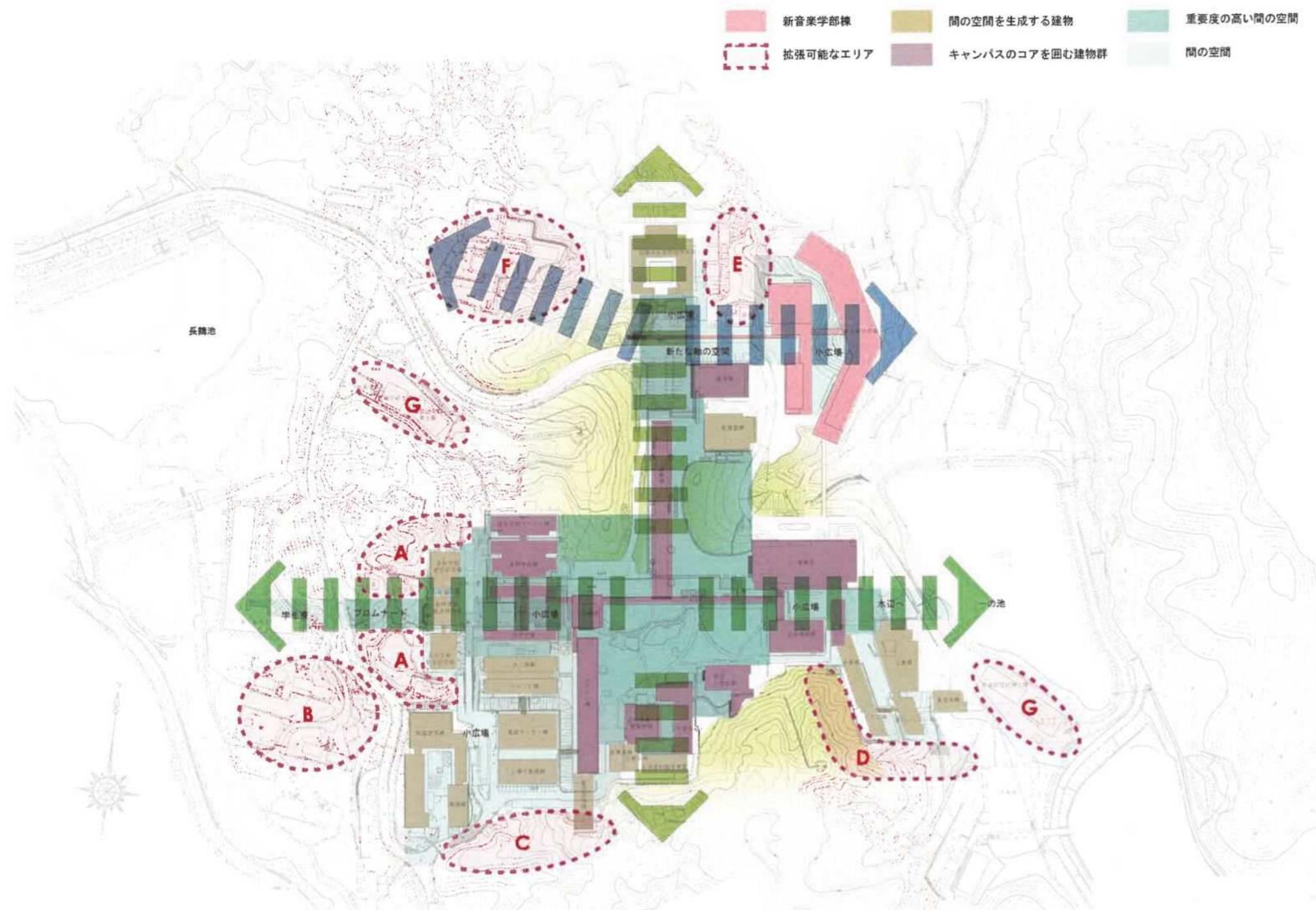
#### [保全方針]

- 1 中長期のキャンパス保全計画を策定し、適切な維持管理に努める。
- 2 教育研究活動の変化に対応していくため、キャンパスの利用形態を継続的に見直す。
- 3 植生調査等によりキャンパス内の生態系を把握し、自然と共生したキャンパスづくりを行う。

### 3 キャンパス活用の方向性

現キャンパスの評価と継承を検討した結果、コアとそれを囲む建物群及び間の空間とそれを生成する建物群に関しては、可能な限り現在の建物を活用することを前提とし、足りない面積や新たな機能を用意するための増築、新築はこれらの外側に展開すべきであることがわかった。これまでの増築、新築も同様に行われている。従ってこれらに、キーワード相関図において考察した視点と、既存の施設機能との連携ならびに地形的条件、生態系への配慮を考察した上で、拡張可能なエリアの設定を行った。

まず、美術棟の西側（Aゾーン）は、絵画系の施設用地として考えられる。また、その南西（Bゾーン）は木に囲まれ彫刻や各種工房など、騒音の発生しやすい施設に向いていると思われる。工房棟、デザイン棟の南（Cゾーン）はデザイン・工芸科に隣接している。現音楽学部棟の南（Dゾーン）は音楽学部が新音楽学部棟へ移行した後の建物利用の方法とともに検討する。管理棟の北側（Eゾーン）は新しい新音楽学部棟と連動した施設計画のための用地である。旧学生寮のある敷地（Fゾーン）は新しい大学の機能拡張のための種地として考えられる。仮設教室が建てられている場所（Gゾーン）は本施設整備後、以前の駐車場に戻すか新たな施設用地としても考えることが出来る。また、これらの拡張を行うに際しては、次年度以降行う植生調査等を十分に考慮し、生態系への影響を最小限に止める努力が必要である。



1/3,000

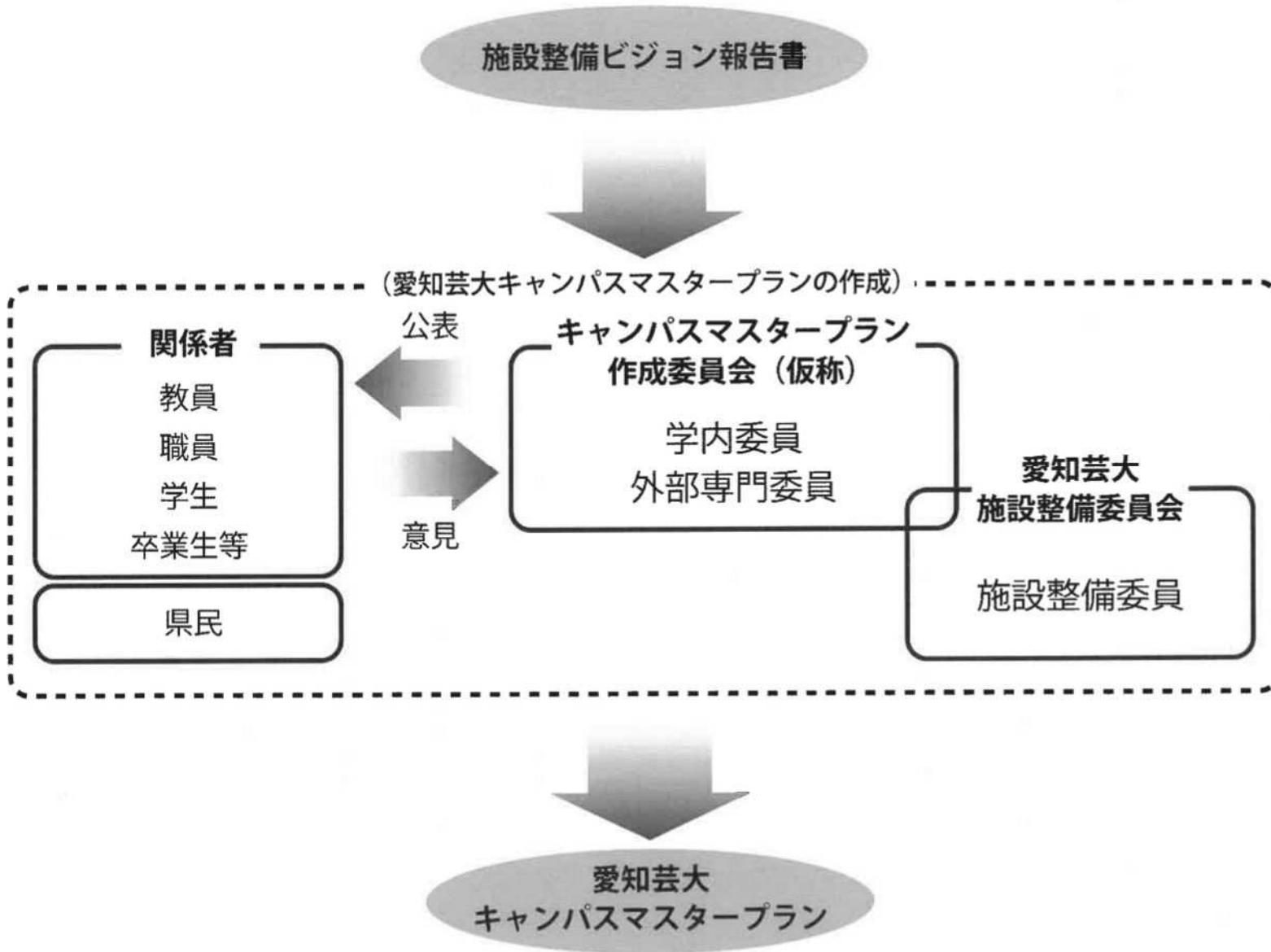
#### 4 今後の施設整備の進め方

この報告書は、キャンパスの整備方針や整備の方針性などについてビジョン検討会で検討してきた結果をまとめ、愛知芸大を整備していくにあたってのビジョンを示したものである。今後は、新音楽学部棟の建設を前提として、報告書の趣旨を踏まえた施設整備の全体計画（キャンパスマスターplan）を作成していくことが求められる。

キャンパスマスターplanは、整備方針において確認された愛知芸大の整備のあり方を具体化していくために、愛知芸大の関係者だけでなく設計や建築に関する専門家の意見を聞きながら作成していくことが望ましい。また、愛知芸大においては、施設整備委員会が中心となって整備に必要な調査を行っていくとともに、利用者である教員や学生などの意見を吸上げていくことが必要である。

そのため、次のことを考慮しながら整備を進めていくことを提案する。

- キャンパスマスターplanの作成にあたっては、学内関係者だけでなく設計や建築に関する専門家を加えた組織を設置し、検討を行う。
- 利用者である教員や学生など、関係者の意見を十分に反映させる。
- キャンパス全体の動線やエネルギー、排水といった基盤整備も含めて検討する。
- キャンパスマスターplanの内容については、積極的に関係者へ説明していく。
- キャンパスマスターplanは、定期的に点検し見直す。



[資料]

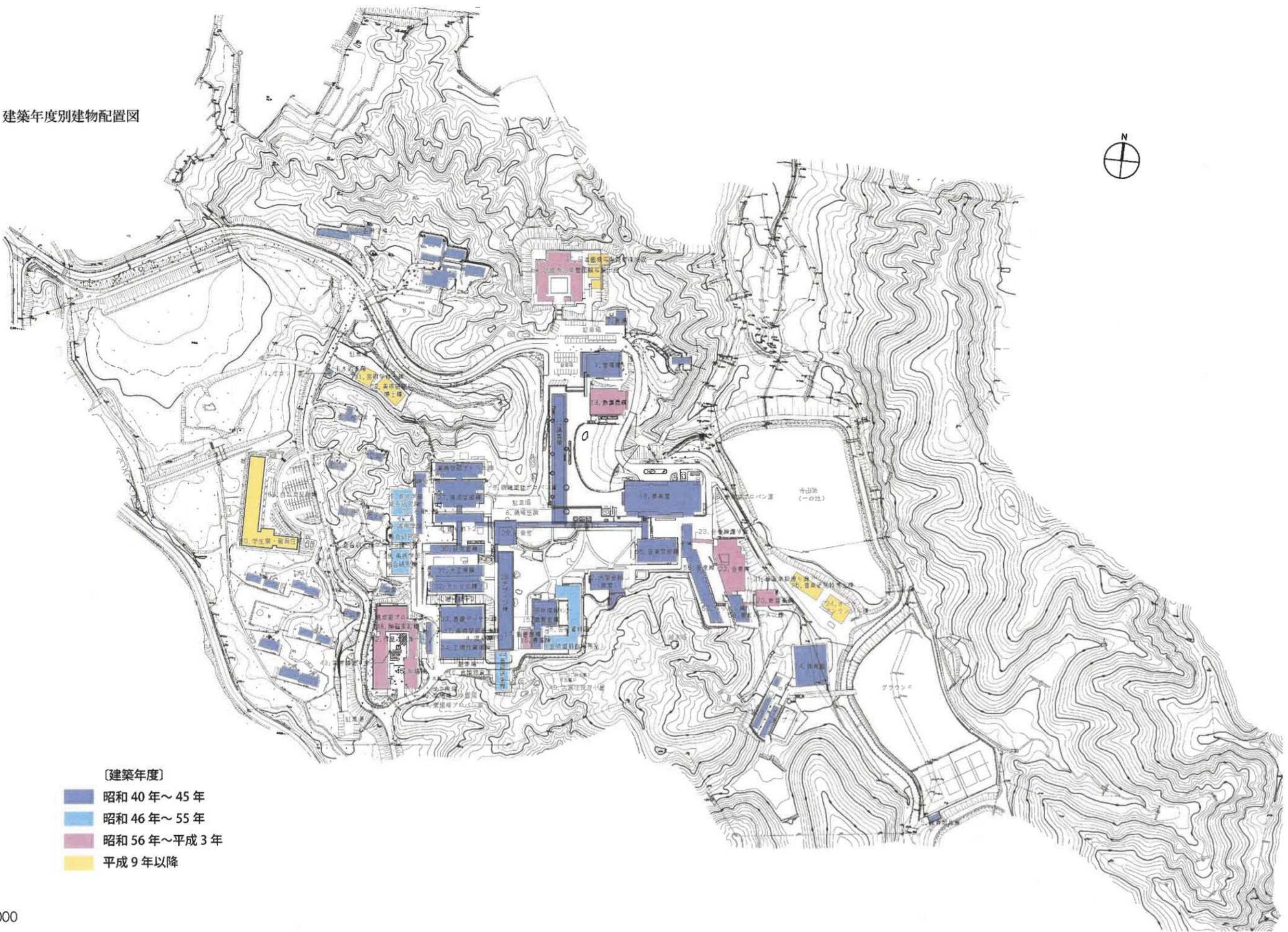
1 既存施設の現状	i
(1) 総括表	
(2) 建築年度別建物配置図	
(3) 主な建物の現状	
2 キーワードに対する主な委員のコメント	x
3 平成 22 年度調査による植生区分図	xiii
4 ピジョン検討会委員名簿／審議経過一覧	xiv

## 1 既存施設の現状

### (1) 総括表

区分	棟名称	キャンパスのコアを生成する建室	「間の空間」を生成する建室	概要						施設の劣化状況		機能上の問題点			耐震性能	コンクリート強度試験
				建築年度	構造	階数	建築面積	延床面積	小計	外部	内部	空間的不足	使い勝手	バリアフリー	耐震等級	最大Iz値
管理	1 管理棟			S43	RC	+3/-1	546.10	1,689.00	4,041.97	東西タイル:剥離	—	組織変更に伴う事務室スペースの狭隘化	衛生設備、空調設備における機能不足	便所内に段差、HWC無 点字ブロック敷設無	H13	0.45
	2 大学会館			S41	RC	+2	455.90	658.00		外壁:パラベント一部剥離 2階軒天白華有	トイレ壁・床:汚れ	学生数約900人に対して、客席数110と少ない	—	出入口に段差、EV無 点字ブロック敷設無	H20	0.41
	3 渡り廊下1			S40	S	+1	288.47	322.45								
	4 渡り廊下2			S42	S	+1	157.66	157.66								
	62 A会議室			S40	W	+1	111.67	111.67								
	5 体育器具庫			S43	CB	+1	37.53	37.53								
	6 クラブハウス			S45	S	+1	382.30	382.30								
	7 車庫			S45	S	+1	148.36	148.36								
	8 機械室棟			S40	RC	-1	517.50	495.23								
	9 機械室棟プロパン庫			S40	RC	-1	2.53	2.53								
教養	10 危険物倉庫			S61	CB	+1	12.24	12.24								
	11 プロワー室			S62	RC	+1	25.00	25.00								
	12 講義棟			S40	RC	+3	1,132.65	1,624.85	3,735.48	外壁:一部鉄筋露出 南北タイル:モルタル共剥離	天井:湿気による白板 壁:モルタルの浮き、汚れ	シビュータ窓が学生数に対応した広さとなっていない。	遮音性不足 冷房装置無し	便所内に段差、HWC無 点字ブロック敷設無	H10	0.53
	13 新講義棟			S63	RC	+2	630.16	688.51								
	14 体育館			S45	RC/S	+1/-1	1,228.60	1,422.12								
	15 閲覧室棟			S42	RC	+2/-1	337.09	930.52	1,551.10	屋根:トップライト漏水 建具:換気機能不全	壁:モルタルのクラック 床:カーペット破れ、磨耗	閲覧スペース、書庫不足	閲覧室は冷房の効きが悪く、暑い	—	H20	0.15※
	16 書庫棟			S42	RC	+3	167.41	352.28								
	17 新書庫棟			H1	RC	+2	134.15	268.30								
	18 奏楽堂			S44	RC	+3/-1	1,380.89	3,275.57	3,287.60	屋根:トップライト漏水 外壁:タハーピット即亀裂	天井:トップライト部鉄筋露出 床:リラウム、ステージ床損傷	舞台、舞台袖が狭い 楽屋不足	建具の防音・遮音性能不足 上下移動が多く、移動が不便	EV無、HWC無 点字ブロック敷設無		
	19 奏楽堂プロパン庫			S44	CB	+1	12.03	12.03								
図書館	20 音楽学部棟			S40	RC	+4	960.01	2,003.52	6,488.67	外壁:床スラブ等鉄筋露出 南北タイル:モルタル共剥離	天井:湿気による剥離 床:リラウムのスキーメイク	アンサンブル、オペラに対応した部屋が不足	防音・遮音性能不足 個人の練習スペースの不足	便所内に段差、HWC無 EV無	H13	0.48
	21 音楽棟			S41	RC	+3	248.27	1,125.57		外壁:RC打放し部鉄筋露出	壁:サッシュ窓りクラック 床:リラウムのスキーメイク	練習室が狭く、数も不足 各室とも天井が低く、容積不足	防音・遮音性能不足 上下移動が困難	EV無、HWC無 点字ブロック敷設無	H13	0.72
	22 音楽学部レッスン棟			S44	RC	+3	182.96	391.91								
	23 音楽学部管打レッスン棟			S44	RC	+1	297.90	297.90								
	24 音楽学部プロパン庫			S50	CB	+1	0.82	0.82								
	25 新音楽棟			S63	RC	+4	247.92	991.69								
	26 合奏棟渡り廊下			S63	RC	+1	35.28	35.28								
	27 合奏棟			H2	RC	+2/-1	832.00	989.27								
	28 合奏棟渡り廊下			H3	S	+1	39.72	39.72								
	29 オペラアンサンブル棟			H18	S	+1	308.86	295.55								
芸術資料館	30 音楽研究科博士棟			H21	S	1	317.44	317.44	1,854.77	屋根:タシカータイ4下漏水	天井:漏水 壁:クラック多箇所	作品の大型化に伴い、展示面積不足 収蔵庫不足	通路、搬入口が狭い	便所内に段差、HWC無 点字ブロック敷設無	H13	0.33
	31 芸術資料館			S47	RC	+2/-1	869.90	1,854.77								
	32 美術学部棟			S40	RC	+2	1,092.38	1,195.56	15,803.83	柱梁:表面剥離 建具:換気機能不全	天井:割れ、剥れ 壁:クラック 床:木レンガ収箱	作品の大型化に伴い、平面的広さ・壁面量不足	実用的な小工房不足のため、外の廊下で作業	EV無、HWC無 点字ブロック敷設無	H10	2.37
	33 デザイン棟			S41	RC	+2	743.58	1,618.38		柱:トップライト漏水	壁:床下腰部クラック 床:湿気による浮き	展示発表スペース不足 階段が狭く、搬入が不便	建物の構造上、冷房を入れても、夏は異常に暑い	EV無	H20	0.46
	34 研究室棟			S41	RC	+1	185.00	185.00								
	35 研究室棟			S42	RC	+2	221.07	596.92								
	36 研究室棟			S42	RC	+1	262.44	486.00		屋根:大工房棟漏水 外壁:柱梁のクラック・表面劣化	天井:仕上材剥れ、垂れ 壁:アトリエ内クラック有 建具:換気機能不全、開閉困難	作品の大型化に伴い、平面的広さ・壁面量不足	実用的な小工房不足のため、外の廊下で作業	EV無、HWC無 点字ブロック敷設無	H10	1.39
	37 研究室棟			S42	RC	+1/-1	1,069.20	1,069.20								
	38 研究室棟			S42	RC	+2	704.70	1,449.90								
	39 研究室棟			S42	RC	+1	672.30	672.30								
	40 研究室棟			S43	RC	+1	211.41	211.41		外壁:RC打放し部鉄筋露出 建具:換気機能不全	壁:アトリエ内クラック有 床:フローリング剥れ・スキ	作品の大型化に伴い、平面的広さ・壁面量不足	実用的な小工房不足のため、外の廊下で作業	EV無、HWC無 点字ブロック敷設無	H20	1.17
美術学部	41 美術学部アトリエ棟			S44	RC	+1	121.50	441.40								
	42 美術学部倉庫棟			S44	RC/S	+1/-1	277.53	277.53								
	43 銅金工房			S45	S	+1	112.68	112.68								
	44 美術学部総合研究棟			S49	RC	+4/-1	1,080.38	2,082.13								
	45 古窯址保存小屋			S49	RC	+1	123.93	123.93								
	46 燃成室プロパン庫			S51	CB	+1	2.16	2.16								
	47 作品収蔵庫			S54	RC	+1	31.26	31.26								
	48 総合研究棟プロパン庫			S49	RC	-1	3.17	3.17								
	49 基礎研究棟			S62	RC	+2	370.45	403.51								
	50 実験棟			S63	S	+1	272.96	281.61								
	51 審査棟マキ置場			S63	RC	+1	7.69	6.78								
	52 審査棟プロパン置場			S63	RC	+1	7.54	7.54								
	53 海磁実習棟															

(2) 建築年度別建物配置図



1/3,000

### (3) 主な建物の現状

平成 20 年度に実施した「芸術大学における文化的建築物保存・活用手法、給排水・エネルギー手法検討」において、建物概況を整理した。これは、キャンパスコアを囲む建築群を含んだ昭和 40 年代に建設された建物に対して、建物規模や構造形式、建物履歴を整理するとともに、破損劣化状況や機能等について行われた既往調査を基にしている。第 9 回ビジョン検討会（平成 23 年 1 月 18 日）においてその結果を報告するとともに、「キャンパスの整備方針」を策定する際の基礎資料として活用した。

#### 1-1. 調査項目

調査資料に記載する項目としては、大きく下記 5 つとし、その他特記事項を記載することとする。

1. 建物規模…建築面積、延床面積、各階面積、階数、高さ
2. 構造形式…主体構造、基礎形式、屋根架構
3. 建物履歴…竣工年、増改築履歴、修繕履歴、耐震診断(最小 Is 値)
4. 破損、劣化状況…外部仕上、内部仕上
5. 機能…空間的不足、使い勝手、バリアフリー対応、その他

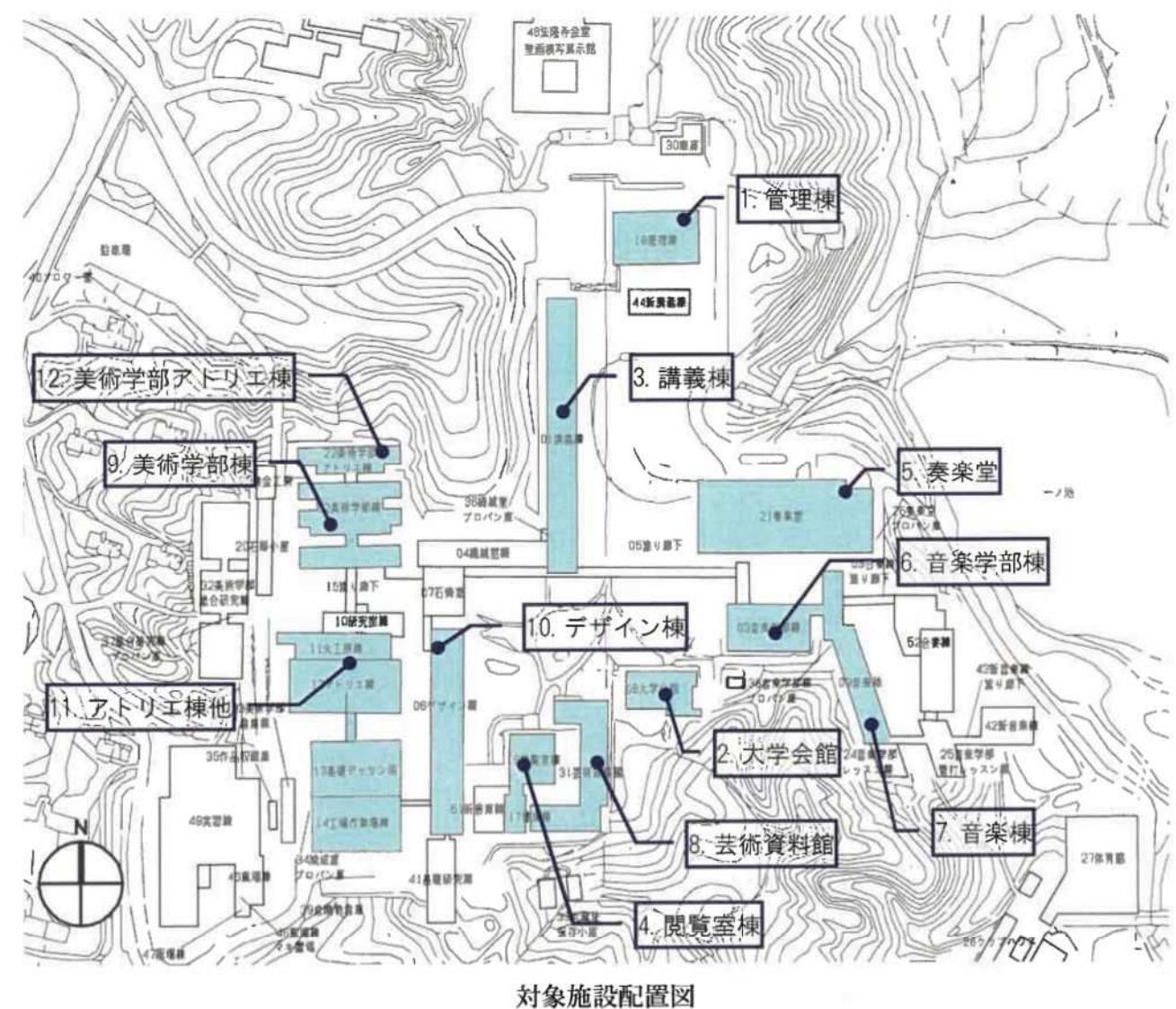
※以上は「県立芸術大学改修基本調査・基本計画」による。

耐震診断結果は、愛知県による「県有施設耐震化状況一覧表」による。

#### 1-2. 対象施設

調査対象施設としては、下記の 12 施設とする。

1. 管理棟 (S 43 年)
2. 大学会館 (S 41 年)
3. 講義棟 (S 40 年)
4. 閲覧室棟 (S 42 年)
5. 奏楽堂 (S 44 年)
6. 音楽学部棟 (S 40 年)
7. 音楽棟 (S 41 年)
8. 芸術資料館 (S 47 年)
9. 美術学部棟 (S 40 年)
10. デザイン棟 (S 41 年)
11. アトリエ棟、大工房棟、基礎デッサン、工場作業場棟 (S 42 年)
12. 美術学部アトリエ棟 (S 44 年)



対象施設配置図



## 1. 管理棟



	建築面積	延床面積	各階面積	階数	高さ
1. 建物規模	733.70 m <sup>2</sup>	1,689.00 m <sup>2</sup>	3F 638.60 m <sup>2</sup> 2F 377.40 m <sup>2</sup> 1F 546.10 m <sup>2</sup> B1 126.90 m <sup>2</sup>	地上3階 地下1階	9.240m
2. 構造形式	RCラーメン構造	独立基礎・地中梁	RCの上シート防水		
3. 建物履歴	竣工年 S40年(1965)	増改築履歴 無	修繕暦 別紙参照	耐震診断 H13	最小Is値 0.45
4. 破損・劣化状況	外部仕上 外部仕上	屋根：トップコートの劣化有 外壁：東西タイルの浮き有 建具：シーリング劣化一部有			
	内部仕上	床・壁・天井：良好			
5. 機能	空間的不足 使い勝手 バリアフリー 一対応 その他	組織変更により、事務室が狭隘化している。 衛生設備、空調設備における機能不良 便所内に段差 車いす使用者用便房なし。 点字ブロック等の敷設なし。 換気扇が建物全体で一元構造になっているため、排気にムラがあり、トイレの臭気の問題がある。 また、污水管が壁面、天井等にあるため修繕しづらく、管理が行き届かない。			
その他					

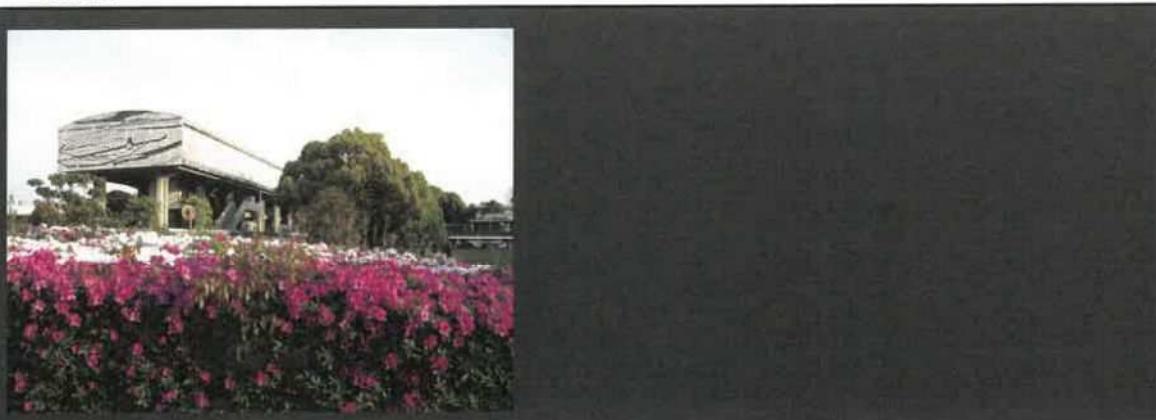
※資料出所：「芸術大学における文化的建築物保存・活用手法、給排水・エネルギー手法検討」（平成20年度）  
なお、表中「修繕暦」について「別紙参照」となっているが、この資料は、別の検討に用いたものから抜粋したものであるので、別紙は省略。  
以下、ix頁まで同じ。

## 2. 大学会館



	建築面積	延床面積	各階面積	階数	高さ
1. 建物規模	546.04 m <sup>2</sup>	655.63 m <sup>2</sup>	2F 199.77 m <sup>2</sup> 1F 455.86 m <sup>2</sup>	地上2階	7.245m
2. 構造形式	主体構造 RCラーメン構造	基礎形式 独立基礎・地中梁		屋根 RCの上塗膜防水	
3. 建物履歴	竣工年 S41年(1966)	増改築履歴 無	修繕暦 別紙参照	耐震診断 H20	最小Is値 0.41
4. 破損・劣化状況	外部仕上 内部仕上	屋根：良好 外壁：パラペット北側剥離、2階軒天白華有 建具：正面入口ドアクローザー調整必要 天井・壁・床：良好 1階トイレ部壁、床汚れ有			
5. 機能	空間的不足 使い勝手 バリアフリー 一対応 その他	学生数約900に対して食堂客席数が110しかなく、学生の利便性を著しく損なっている。 - 出入口段差あり。 車いす使用者用便房なし。 点字ブロック等の敷設なし。 その他			
その他					

### 3. 講義棟



	建築面積	延床面積	各階面積	階数	高さ
1. 建物規模	1,206.33 m <sup>2</sup>	1,624.85 m <sup>2</sup>	3F 1,206.63 m <sup>2</sup> 2F 418.21 m <sup>2</sup> 1F 0.00 m <sup>2</sup>	地上3階	10.500m
2. 構造形式	主体構造		基礎形式		屋根
	RCラーメン構造		独立基礎・地中梁		RCの上 シート防水
3. 建物履歴	竣工年	増改築履歴	修繕暦	耐震診断	最小Is値
	S40年(1965)	無	別紙参照	H10	0.53
4. 破損・劣化状況	外部仕上	屋根：トップコート劣化有 外壁：3階床スラブ・パラペット先端：鉄筋露出 南北デザインタイル：下地モルタル共全面的な浮き上がり有。 建具：開閉困難			
	内部仕上	天井：湿気による剥離・浮き等多数存在。壁：モルタルの浮き、汚れ 床：スキ・めくれ多数有。			
5. 機能	空間的不足	コンピュータ室に十分な広さが取れず、コンピュータ数が学生数に全く対応していない、ゼミで使えるような少人数の講義室がないなど、必要とされる講義形式に対応できない。			
	使い勝手	遮音性がなく、隣室の音が漏れる。 冷房装置がない。 別室への移動の際に2階へ降りなくてはならず、不便である。			
	バリアフリー 一対応	便所内に段差 車いす使用者用便房なし。 点字ブロック等の敷設なし。			
	その他				
その他	改修の際は、3階屋根スラブ、2階床スラブの断熱・結露対策を考慮。				

### 4. 閲覧室棟



	建築面積	延床面積	各階面積	階数	高さ
1. 建物規模	481.58 m <sup>2</sup>	930.62 m <sup>2</sup>	中3F 83.50 m <sup>2</sup> 2F 428.66 m <sup>2</sup> 1F 337.09 m <sup>2</sup> B1 81.37 m <sup>2</sup>	地上3階 地下1階	10.170m
2. 構造形式	主体構造		基礎形式		屋根
	RCラーメン構造 屋根：S造		独立基礎・地中梁		シート防水
3. 建物履歴	竣工年	増改築履歴	修繕暦	耐震診断	最小Is値
	S40年(1965)	無	別紙参照	H20	0.15※
4. 破損・劣化状況	外部仕上	屋根：トップコートの劣化有、トップライト漏水有 外壁：良好 建具：換気機能不全・ガラス割れ、シーリング劣化有			
	内部仕上	天井：雨漏れによるシミ有 壁：モルタルのクラック 床：カーペット破れ、磨耗有			
5. 機能	空間的不足	閲覧スペース、書庫（書棚）が不足しており、図書館としての機能を果たしていない。			
	使い勝手	2階の閲覧室は全面ガラス張りの温室構造となっているため、冷房の効果が悪く異常に暑い。			
	バリアフリー 一対応	エレベーターの設置あり。 車いす使用者用便房あり。 出入口の段差なし。			
	その他	半地下構造になっているため地下からの浸水がひどく、応急処置はなされているものの、抜本的な解決が出来ないため、頻繁に再発する。			
	その他	換気対策・断熱対策必要			

※は再調査予定

## 5. 奏楽堂



	建築面積	延床面積	各階面積	階数	高さ
1. 建物規模	1,593.84 m <sup>2</sup>	3,275.59 m <sup>2</sup>	3F 11.72 m <sup>2</sup> 2F 1380.90 m <sup>2</sup> 1F 1385.83 m <sup>2</sup> B1 497.14 m <sup>2</sup>	地上3階 地下1階	9.900m
2. 構造形式					
RCラーメン構造					
3. 建物履歴	竣工年	増改築履歴	修繕暦	耐震診断	最小Is値
	S44年(1969)	H14 改修	別紙参照	H10	H14 耐震改修済
4. 破損・劣化状況	外部仕上	屋根：トップライト周り漏水有 外壁：東側ルーバージョイント部亀裂、南庇下タイル浮き有 建具：ハイサイド漏水、ガスケット劣化			
	内部仕上	天井：トップライト部鉄筋露出 壁：下地モルタルクラック多い 床：リノリウムの損傷・ステージ床損傷			
5. 機能	空間的不足	舞台が狭く、大編成のオーケストラの場合に正常な配置にできない、樂屋が不足しているなど、コンサートホールとして不適切である。 舞台袖も狭くオペラ上演にも支障がある。			
	使い勝手	二重扉になっていない等の構造上の問題から、防音・遮音性能が低く、外部の音（ヘリコプター、車の排気音等）が中に聞こえる。 上下移動が多く、レッスン室・練習室からのアクセスが困難で、大型の樂器を持って移動するのに使いづらく危険。			
	バリアフリー 一対応	エレベーターの設置なし。 車いす使用者用便房なし。 点字ブロックの敷設なし。			
	その他	学部の顔、学外へのアピールとして大学の表側に配置することが望ましい。 旧型の鋼枠サッシのガラスを使用しているため、既存のサッシが使用できず、またガラス面も多いため、修繕コスト額の費用がかかる。			
その他	全面的な防音仕様の見直しが必要				

## 6. 音楽学部棟



	建築面積	延床面積	各階面積	階数	高さ
1. 建物規模	960.91 m <sup>2</sup>	2,003.52 m <sup>2</sup>	4F 292.00 m <sup>2</sup> 3F 292.00 m <sup>2</sup> 2F 614.94 m <sup>2</sup> 1F 804.58 m <sup>2</sup>	地上4階	13.470m
2. 構造形式					
RCラーメン構造・壁式構造					
3. 建物履歴	竣工年	増改築履歴	修繕暦	耐震診断	最小Is値
	S40年(1965)	無し	別紙参照	H13	0.48
4. 破損・劣化状況	外部仕上	屋根：トップコートに劣化有 外壁：3階床スラブ・パラペット先端：鉄筋露出 南北デザインタイル：下地モルタル共全面的な浮き上がり有。 建具：開閉困難			
	内部仕上	天井：湿気による剥離・浮き等多数存在。 壁：モルタルの浮き、汚れ 床：リノリウムのスキ・めくれ多数有。			
5. 機能	空間的不足	演奏形態の変化（アンサンブル、オペラなど）に対応した部屋が不足しており、現在の音楽教育に必要とされる新しい授業に対応できない。			
	使い勝手	外部の音や隣室の音が聴こえるなど、防音・遮音が不十分である。 個人の練習スペースが不足しており、廊下で練習せざるを得ないなど、学生の十分な練習環境がない。			
	バリアフリー 一対応	便所内に段差。 車いす使用者用便房なし。 エレベーターの設置なし。			
	その他	全体的な防音仕様の見直しが必要			

## 7. 音楽棟



	建築面積	延床面積	各階面積	階数	高さ
1. 建物規模	353.41 m <sup>2</sup>	1,125.57 m <sup>2</sup>	4F 65.31 m <sup>2</sup> 3F 353.42 m <sup>2</sup> 2F 353.42 m <sup>2</sup> 1F 353.42 m <sup>2</sup>	地上4階	9.640m
2. 構造形式	RC壁式構造	布基礎	RCの上塗膜防水		
3. 建物履歴	竣工年 S40年(1965)	増改築履歴 無	修繕暦 別紙参照	耐震診断 H13	最小Is値 0.72
4. 破損・劣化状況	外部仕上 内部仕上	屋根：トップコートに劣化有 外壁：打放部の劣化(鉄筋露出)。 建具：良好 天井：廊下部雨シミ有、専用部防音性能低 壁：サッシュ廻りクラック有、防音性能低 床：リノリウムのスキ・めくれ有、じゅうたん防音性能低い			
5. 機能	空間的不足 使い勝手 バリアフリー 一対応 その他	練習室が狭く、数も不足している。各室とも容積が足りず、適切な残響感が得られないため、プロの演奏家の養成に必要とされる練習環境を提供することができない。 平面的な広さのみでなく、空間の広さ、天井の高さが必要。 4階の練習室のピアノの音が2階の研究室で聴こえるなど、防音・遮音が不十分である。 奏楽堂へのアクセスに上下移動が多く、大型の楽器を持って移動するのに使いづらく危険。 エレベータの設置なし。 車いす使用者用便房なし。 点字ブロック等の敷設なし。			
その他		全体的な防音仕様の見直しが必要			

## 8. 芸術資料館



	建築面積	延床面積	各階面積	階数	高さ
1. 建物規模	872.86 m <sup>2</sup>	1,882.77 m <sup>2</sup>	2F 153.81 m <sup>2</sup> 1F 897.89 m <sup>2</sup> B1 831.07 m <sup>2</sup>	地上2階 地上1階	8.225m
2. 構造形式	主体構造 RCラーメン構造	基礎形式 独立基礎・地中梁		屋根 塗膜防水、ゴーレックス 防水の上クリンカータ イル張り	
3. 建物履歴	竣工年 S47年(1972)	増改築履歴 無	修繕暦 別紙参照	耐震診断 H13	最小Is値 0.33
4. 破損・劣化状況	外部仕上 内部仕上	屋根：クリンカータイル張り下漏水有 外壁：良好 建具：開閉部補修推奨 天井：一部の部屋に漏水 壁：構造クラック多数 床：良好			
5. 機能	空間的不足 使い勝手 バリアフリー 一対応 その他	展示作品の大型化に伴い展示面積の広さ・壁面の量が不足している。 収蔵庫が狭く、卒業生の作品等を収納するスペースが不足している。 展示室と収蔵庫の連絡や搬入口の狭さなど、美術館としては不十分。 便所内に段差あり。 車いす使用者用便房なし。 点字ブロックの敷設なし。 学部の顔、学外へのアピールとして大学の表側に配置することが望ましい。			
その他					

9. 美術学部棟



	建築面積	延床面積	各階面積	階数	高さ
1. 建物規模	1,128.33 m <sup>2</sup>	1,195.56 m <sup>2</sup>	2F 839.16 m <sup>2</sup> 1F 356.40 m <sup>2</sup>	地上2階	9.750m
2. 構造形式	RCラーメン構造・壁式構造	独立基礎・地中梁	RCの上塗膜防水		
3. 建物履歴	竣工年 S 40年(1965)	増改築履歴 無	修繕暦 別紙参照	耐震診断 H10	最小Is値 2.37
4. 破損・劣化状況	外部仕上 アトリエ棟柱梁：表面剥離箇所多数 建具：換気機能不全				
	内部仕上 天井：割れ・はがれ・垂れ多い 壁：クラック激しい 床：木レンガ収縮、アスファルト目地切れあり				
5. 機能	空間的不足 作品の大型化に伴い平面的な広さ・壁面の量が不足している。 使い勝手 専攻毎に実用的な小工房のようなスペースがなく、外の廊下等で作業せざるを得ない。				
	バリアフリー 一対応 エレベータの設置なし。 車いす使用者用便房なし。 点字ブロック等の敷設なし。				
その他	改修の際は、各アトリエに換気対策・断熱対策を考慮。				

10. デザイン棟



	建築面積	延床面積	各階面積	階数	高さ
1. 建物規模	901.35 m <sup>2</sup>	1,618.38 m <sup>2</sup>	2F 874.80 m <sup>2</sup> 1F 743.58 m <sup>2</sup>	地上2階	7.250m
2. 構造形式	主体構造 RCラーメン構造	基礎形式 独立基礎・地中梁	屋根 塗膜防水 シート防水		
3. 建物履歴	竣工年 S 41年(1966)	増改築履歴 無	修繕暦 別紙参照	耐震診断 H20	最小Is値 0.46
4. 破損・劣化状況	外部仕上 屋根：良好 建具：トップライト廻り漏水有				
	内部仕上 天井：トップライト周りの防水処理、及び梁・一部天井の補修推奨 壁：廊下腰部クラック有 床：湿気による浮き有				
5. 機能	空間的不足 学生のプレゼン練習のための展示発表スペースが不足している。 デザイン教室が2階にあるため、大型の作品の搬出に狭い階段を使わなくてはならず、不便である。				
	使い勝手 構造上の問題（温室構造）のため夏に異常に暑く、冷房を入れても40度近くになり、芸術制作の場としては非常に不適切である。				
バリアフリー 一対応	バリアフリー 一対応 出入口段差あり。 エレベータの設置なし。				
その他	その他 旧型の鉄枠サッシのガラスを使用しているため、既存のサッシが使用できず、またガラス面も多いため、修繕には多額の費用かかる。				
その他					

11. アトリエ棟、大工房棟、基礎デッサン、工場作業場棟



1. 建物規模	建築面積	延床面積	各階面積	階数	高さ
	2,817.32 m <sup>2</sup>	3,588.30 m <sup>2</sup>	2F1,508.50 m <sup>2</sup> 1F 2079.80 m <sup>2</sup>	地上2階	11.300m
2. 構造形式	主体構造	基礎形式	屋根		
	RCラーメン構造 一部S造	独立基礎・地中梁	RCの上塗膜防水		
3. 建物履歴	竣工年	増改築履歴	修繕暦	耐震診断	最小Is値
	S40年(1965)	無	別紙参照	H10, H20	0.53～1.83
4. 破損・劣化状況	外部仕上	屋根：大工房棟漏水有 外壁：柱梁のクラック・表面劣化有。鉄筋露出部有 建具：換気機能不全、開閉困難、ガラスの割れ、シーリング劣化			
	内部仕上	天井：仕上材剥がれ、垂れ有 壁：アトリエ内クラック有 床：フローリングブロック剥がれ・スキ有			
5. 機能	空間的不足	作品の大型化に伴い平面的な広さ・壁面の量が不足している。 アトリエ棟の出入口がひとつしかなく、高さに制限があるため、大型作品の搬出に不便である。			
	使い勝手	専攻毎に実用的な小工房のようなスペースがなく、外の廊下等で作業せざるを得ない。 学生の作品を収納する場所がなく廊下に保管せざるを得ない。			
	バリアフリー 一対応	エレベータの設置なし。 車いす使用者用便房なし。 点字ブロック等の敷設なし。			
	その他	半地下構造になっているため地下からの浸水がひどく、応急処置はなされているものの、抜本的な解決が出来ないため、頻繁に再発する。			
その他	換気対策・断熱対策必要				

12. 美術学部アトリエ棟



1. 建物規模	建築面積	延床面積	各階面積	階数	高さ
	443.56 m <sup>2</sup>	441.40 m <sup>2</sup>	1F 441.40 m <sup>2</sup>	地上1階	7.140m
2. 構造形式	主体構造	基礎形式	屋根		
	RCラーメン構造	独立基礎・地中梁	RCの上塗膜防水		
3. 建物履歴	竣工年	増改築履歴	修繕暦	耐震診断	最小Is値
	S44年(1969)	無	別紙参照	H20	1.17
4. 破損・劣化状況	外部仕上	屋根：全面補修済 外壁：打放し部鉄筋露出 建具：換気機能不全 その他：北側軒天一部崩壊			
	内部仕上	天井：仕上材剥がれ、垂れ有 壁：アトリエ内クラック有 床：フローリングブロック剥がれ、汚れ有			
5. 機能	空間的不足	作品の大型化に伴い、平面的な広さ・壁面の量が不足している。			
	使い勝手	各専攻毎に実用的な小工房のようなスペースがなく、外の廊下等で作業せざるを得ない。			
	バリアフリー 一対応	エレベータの設置なし。 車いす使用者用便房なし。 点字ブロック等の敷設なし。			
	その他	旧型の鉄枠サッシのガラスを使用しているため、既存のサッシが使用できず、またガラス面も多いため、修繕には多額の費用かかる。			
その他	アトリエの換気対策必要。断熱対策が必要。				

## 2 キーワードに対する主な委員のコメント

キーワード	水津委員	谷口委員 (計画的な記述にしている)	堀越委員	西澤委員	福本委員
設計思想	<ul style="list-style-type: none"> <li>このキャンパスを見て、生活して、我々が最も学ばねばならない事は、美を志す心、理想を志す心であると思う。これらの主要な建物は、建築家吉村順三氏が理想の芸術の学園の実現を目指し、最先端の建築を追及した姿勢そのものである。40年も前にその精神は既に示された。以来、それはここで巣立つ駆け出しの芸術家にとって最大の教師であったはずである。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自然条件を活かし、日本文化の向上に資する、いきいきとした楽しいキャンパスを創造する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>講義棟と渡り廊下があつて、その先端部に建物がある。それが大学会館とスロープがゆるやかにつながつて、奏楽堂の前も含め、ランドスケープとしてのゆるやかなスロープが全体構成としてキャンパスを形づくっている。土の中から講義棟が出てくるイメージができるので、これがキャンパスの生成の設計思想となっていると考えられる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>設計の前提条件：丘の上 ⇒命題・課題：丘の上の理想的キャンパスとは ⇒解：建物をラビリンスの様な人為的な一つの塊りとせず、明るくダイナミックに丘の上に散開＋大空や緑に共鳴 →丘・建物・大空・緑が一体となって存在することが重要 →四要素の確保＝丘を削らない(=谷を埋めない) + 建物を維持 + 天空の確保 + 緑を減らさない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>芸術家、音楽家としての感性を(知らぬ間に)養えるキャンパスであり続けるべし。古いものと新しいものの融合。</li> </ul>
分棟	<ul style="list-style-type: none"> <li>建築の機能を複合させず分棟にするということは、機能主義でありながら画一化に陥ること無く多様な建築タイプの必然性を説明できる方法として、有効な戦略だったと思う。</li> <li>一方、バラバラになってまとまりがつかなくなる危険性については「やせた形」や「全体性」等の考え方によって回避している。また、分棟案は多くの隙間を生み、室内外が有機的に結びついた環境を形成し、「間の空間」を生成する方法論にもなっている。このように「分棟」「間の空間」「全体性」「やせた形」は、それぞれが独自の意味を持っていながら他を保管する関係を形成している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>創作活動の場としての個々の部分の特性を保ち、人為的な一つの塊とせず、互いに適当な距離を保った配置とする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>キャンパスを生成するにあたり、敷地について自然の条件を損なわないようにする為に「ダイナミックに丘の上に散開させる」ことが見事に成功している。</li> <li>他の項目の中に「分棟」内容が記述されている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>このキーワードは、上記「設計思想」で示した通り、設計上の命題に対する解の一つであり、設計手法。</li> <li>「分棟」にしたことによって生じた建物間の空間 ・変化のある空間、人々の快適な通路、楽しい休憩の場所、交流の場</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>都会の大学にはできないことをすべき。 ・音楽の互いの施設、専攻はある程度近くになければならないが、管打などは（建物内に閉じ込めるべきではなく音が外へと発散していくので）他の専攻施設とはある程度の距離を保つべき。</li> </ul>
間の空間	<ul style="list-style-type: none"> <li>分棟による建物同士の間の生まれた変化のあるオープンスペースは、常に外気と触れ、どの部屋からも屋内屋外の行き来を可能にしている。そして、各部屋の機能がこのオープンスペースに漏れ出して、芸術大学らしい雰囲気を作り出している。外廊下、ピロティ、各棟の入口付近、屋上、彫刻の石の作業場、石置き場、ピロティは、現在でも多くの使われ方が実践されている。このような雨をしのげる多目的な空間は、本学、特に美術にとって必要な空間であろう。しかし、音楽学部の間の空間は、斜面地にあるためか、あまり活用されていないようである。音楽学部でのオープンスペースのあり方は、異なる研究が必要である。</li> <li>彫刻の石の加工作業は、屋外の作業場で行われるが、その一部と石材の置場が広場に溢れ出でており、騒音問題とともに解決すべき要件となっている。</li> <li>油画棟のピロティは常時制作に使われており、賑わいというより作業空間の不足が指摘されている。空や丘につながる広がりを持った間の空間を維持するには、安易な高層化は避けるべきであろう。また、陶磁棟の中庭は明るく使いやすいが、他の施設や間の空間との連携を持っていないため、全体性に参加できず孤立している。このようなラビリンスを避けるための分棟、間の空間なのであるが、後から作られた施設にはそれが守られていない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>建物と建物の間につくられる変化のある空間、さらに重なる丘と空へのひろがりをもった空間を“間の空間”と定義し、それらを人々が快適に行き交う通路で連結し、楽しい休憩の場所、研究や作業の後の交流の場を創出する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>講義棟と渡り廊下が大学会館にスロープがゆるやかにつながっている。</li> <li>石膏棟を抜ける視線と水辺が上手く透明性の中でつながっていることで、資料館の前の空間が立体的な感じになる。</li> <li>入ってきたアプローチの部分を管理棟と講義棟との段差の作り方と、建物の位置関係の微妙なところが、3次元的に落ち着いて良い大事だと思う。</li> <li>音楽学部棟と奏楽堂との間の空間も非常に微妙な空間で、向こう側に抜けていくことで、遙かな丘陵が見えていた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>分棟にしたことで生じたものが「間の空間」 ・「間の空間」に多様な存在意義を与えることで、設計内容を再構築。 ・でなければ、「間の空間」は単なる「残余空間」として無意味なものになる。設計内容を再構築したところが非凡。したがって、「間の空間」が持つ存在意義を維持することが重要。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>人の流れの少ない、全体から外へ向いた空間の活かし方が難しい。雑草と廃棄物で満たされではならない。 ・彫刻や管打などは音の方向性に配慮が必要で、間、空間を上手く利用すべき。</li> </ul>
やせた形	<ul style="list-style-type: none"> <li>内部機能の外化＝抽象化、構造化、視覚化とはいからもモダニズム建築である。この考え方によって本学建築群には実に多様な構造形式が用いられ、機能の外化を具現化している。機能が形になるということは、逆に言えば形の個性や多様性からその空間を利用する人間の欲求が読み取れるとも言える。しかしながら、40年間人間の欲求が変化しないと考えることもまた難しい。あまりに特殊な機能に限定しそぎ、用途転換や機能更新が難しい棟もある（デザイン棟等）。当初想定された機能設定自体が今日でも有効かを確認する必要がある。</li> <li>また、大学が存在する以前に計画されたために、現場の声を反映する機会がなかったに違いない。ユーザーの機能的欲求を再確認する必要がある（日本画アトリエ等）。その結果、内部機能を外化するというポリシーが維持できなくなる場合が出てくるだろう。今日の建築的外観は、必ずしも内部機能を代表しない。コンバージョンによって外観と内部機能が矛盾しても、それはそれで豊かさとして解釈されるからである。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>“やせた形”によって、内部機能の抽象化をはかり、それにしたがつた最も単純な構造を採用し、それぞれ独自の形態を外部に主張し、必要なものを現わし、取り去れるものを取り去った形とする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>食堂の中に入ったとき、一番手前のガラスのところに座ったとき、スープときれいで、スリムな渡り廊下がよく見える。</li> <li>全体として、装飾という概念を、近代のコンクリートによる言語に置き換えた点が安定した、しかも出しゃばらない形を示している。</li> <li>単純な構造体によって建物は構成されて、軽快な廊下でつなげられている点が自然との調和をも生んでいるとされる。</li> <li>露出して処理されているものやサッシュの存在、そして現代的幾何学形状がコンクリートの骨太さを緩和している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「やせた」とは、無駄を省いた、あるいは、無駄のない、という意味に解釈できる。</li> <li>竣工から40年が経過した現状を見ると、建物はやせているが、周囲の自然が建物の周りにとりつく「無駄」（実態は無駄ではない）となっていることで、動物における骨格と臓器・肉の関係に酷似。</li> <li>やせた形は、建物周囲の自然の存在によって際立つこととなる。両者が共存することが重要</li> </ul>	

キーワード	水津委員	谷口委員 (計画的な記述にしている)	堀越委員	西澤委員	福本委員
全体性、全体へのつながり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・分棟及び間の空間の生成によって施設はむやみな巨大化を避けた一方、分裂し断片化し錯綜化する危険性が生じてくる。総合大学等で学部毎に縦割りに施設整備を行うと、連続性が希薄で孤立した辺境が生じてしまう例がある（本学でも同様のことが既に起きている）。こうしたこと为了避免るために、小割りにした建築群に再び全体性を獲得する方法が必要だという考え方には同意できる。</li> <li>・分棟した各建物が、全体性と繋がる「間の空間」「透き通し」「重ね合わせ」「軸」と結びつき、そこに建築に内包する活動を表出させることで、芸大らしい風景や賑やかさ、いきいきとした雰囲気が生成されていると思う。</li> <li>・建築によって「間の空間」が規定されているのであるが、「間の空間」のネットワークを介して全体性へ繋がってゆく。この見えない空間構造こそ本キャンパスで最も重要なものの一つであろう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全体としての閉鎖性を排するために、キャンバスでも生活・活動自体を出来るかぎり全体場への参加・登場を促す。</li> <li>・参加の仕方には、ガラス越しの参加から活動自体の登場、小広場から中心の広場へのつながりといった段階性をもたせる。表出されたおののおのの行動の集まりが“全体場”的性格をつくり、量的なものによらずに、キャンバスをいきいきさせる。集合した個々の建築群のデザインを尊重し、芸術大学の包含する多様なものの性格を強く表出することにより、それらが集まって作り出いきいきした全体像を追求する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・軸と各建物が全体を貫通することも確かに全体性を示すものである。しかし、美術、音楽、管理棟の建物群が重りとなり、講義棟、渡り廊下あるいは離隔距離が竿の働きをするモーメントが生成され、そのモーメントが全体として釣り合っている印象を受け、そのことがこのキャンバスを安定配置させていると思われる。これが全体性を生んでいる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・設計手法は、丘の上を眺めて分棟をつくる（マクロ⇒ミクロ）。そこでできた「間の空間」に存在意義をつくることで、配置を再構築（ミクロ⇒マクロ）。「間の空間」の配置を再確認し、評価する必要あり。</li> </ul>	
地形	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地形を尊び、山みなみに沿うように低層棟を配置している。それによって生まれた空の広さ、開放感がすばらしい。</li> <li>・自然環境へのダメージを考慮して建築面積を減らす方法としては、高層化が最も簡単である。しかし、ここではむしろ建物と地形が一体となり、建築自体からもこの土地の特徴が読み取れるかのような「人と建物との融合」が具現していると思う。</li> <li>・2つの沢の頂部にピロティがあり、自然地形を活かしたランダムスケープが実現している。このキャンバスの最も美しい場面の一つであろう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2つの沢は、構成上の大きな要素とし、風景に定着するのびやかな構成を維持する。建物・広場・道路は、地形と自然環境の持っている性格に従って配置し、造成土量と自然林の破壊を出来るだけ少なくする。</li> <li>・明るくダイナミックに丘の上に展開する講義室棟は、キャンバス中心部への導入空間を作り、一方、元々あった2つの沢の空間のつながりを、ピロティによって残した存在であることを確認する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・元の地形を大きく人工的に造成や改変することを最小限化しようとした努力が実っていると考えられる。そのことが建物群の群構成と軸線の立体性を導いている。平面的になりがちなキャンバスを地形との対話によってピロティや緩やかな傾斜をも取り込み、巧みに展開している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・尾根+谷、という丘陵地の基本的地形を改変せず。</li> <li>・尾根に講義棟を置くことで、尾根の存在を強調、尾根を背骨に見立てて、→講義棟より高い建物を建ててはいけない、という意味。</li> <li>→尾根+谷を改変しないこと。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・騒音と（たとえそれが美しい音楽であっても受け取る側にとって）なるものを地形によりある程度遮断してある。今後もそれを有効に利用すべきである。</li> </ul>
広場	<ul style="list-style-type: none"> <li>・この何もない空間の広がりこそ、このキャンバスの心臓と言える。そしてその空間を規定している建築群の役割的重要性も高い。</li> <li>・樹木が生長したため、開学時には見えたかもしれない遠景は今は見ることができない。ただし、雑木林の手入れは必要であり、間伐すれば遠景が見える可能性はある。</li> <li>・中央の広場の南奥の学生会館裏は、樹木が生長し、広場を空間的広がりの一端を担うほどになっている。床の間の土壁に相当する山であり、キャンバスの景色を作る大切な要素である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・主要な建物は中心に自由な広場を作り、広場からは遠くの山々や丘陵が眺められる環境とする。</li> <li>・丘の南の部分の高まりは、広場を抱き込んで、自然の境とする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・講義棟と奏楽堂に挟まれた空間、学生会館前の芝、美術学部棟と石こう室の中庭的空间、音楽棟と奏楽堂との間の空間など、空間の規模の大小を、その建物用途における規模性を配慮して、巧みに配している。</li> <li>・広場が視線の節点として働いている。建物によるモーメントを緩和するものとしての働きと配置である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・分棟によって生じた「間の空間」の最大が広場⇒「自由な広場」。</li> <li>・何が自由か？ →眺望+行動</li> <li>・広場からの眺望の確保+広場から他所へのアクセス、が重要。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新音楽学部棟の建設に伴う軸線によって生まれる管理棟前の駐車場の空間の重要性は感じる。しかし、今的一般教養棟東から管理棟前までの広場さえも（良い空間ではあるが）活かされているとは思わない。</li> <li>・法隆寺周辺への施設建設などにより人の流れを生むことが必要かもしれない。また、管理棟前を駐車場でなくするのは良いが、今後その周辺に現状以上の駐車場スペースを確保しなければならないであろう。</li> </ul>
透き通し・重ね合わせ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・分棟によってバラバラになった建築群と間の空間に再び全体性という統率を取り戻すための方法が「透き通し、重ね合わせ」である。最も重要な透き通しは、東の音楽学部と西の美術学部を横差しにしている軸に沿って展開されている。この軸上に重なる建物は、必ず通路か、ピロティか、ガラスでその透明性をもって向き合っており、視線はその向こう側に抜けてゆく。この手法は主要な軸とは関係のないデザイン棟、美術学部棟、図書館といった建築の空間構成にも登場し、複雑な「抜け」のネットワークを形成している。これらの透明性によって、景色は一層重層なものになり、奥行き感を増す一方、よりマイナーな奥まった空間がよりメジャーな中心へと繋がってゆく関係性を断ち切らずにすんでいる。本学のキャンバス空間の重要な特徴となっている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・“向こう側までの透き通し”を確保し、キャンバス内外の空間のつながりを作り、重ね合わせられた視線に生活のシルエットを参加させる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・食堂の中に入ったとき、一番手前のガラスのところに座ったとき、スープときれいで、スリムな渡り廊下がよく見える。</li> <li>・石膏棟を抜ける視線と水辺が上手く透明性の中でつながっていることで、資料館の前の空間が立体的な感じになる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・分棟の欠点（棟ごとにばらばらに存在）を克服⇒透き通しにより、隣棟との関係を確保。 ⇒重ね合わせにより、周囲との関係を確保。</li> </ul>	

キーワード	水津委員	谷口委員 (計画的な記述にしている)	堀越委員	西澤委員	福本委員
視線・軸線	<ul style="list-style-type: none"> <li>建築だけでなく広場や通路、ガラス張りやピロティといった空間の視線と軸線は、キャンパス全体を貫いている。この秩序はキャンバス全体の骨格であり、部分の検討においても常に参考されるべき内容である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>東西の空間軸は、石膏室を通して美術小広場をぬけ、一方では音楽キャノピー・小広場から、音楽学部棟のピロティを通して、外の空間へとのびている。南北軸は、講義室棟で強調され、南北の丘へのびている。この二つの軸は、行動の軸であり、設備幹線の軸と一致させる。建物の量と間合いのバランス軸でもありそれを踏襲する。</li> <li>キャンバス内部から外の環境へつづく視線を重視し、池・丘の重なり・山々や街が、間の空間に流入し、ひろがりを保つことを維持する。</li> <li>特に中心の広場からは、キャンバスの全体像を一望に把握できることを堅持し、小広場でも、その空間に応じた視線の構造を維持することに努め、個々の建物からも、広場に向かう視線を前提とする。</li> <li>キャンバス内外の環境を背景に、教授会や理事会等が開催されることを期す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>講義棟がフォルテの軸線であり、渡り廊下がピアニッシモの軸線として、相互影響をもち、デザイン棟の分岐軸、レッスン棟の広がりを見せる軸の構成が、単調さに陥らせていない。</li> <li>デザイン棟の外側の平行線的なところが非常に味わいよく出来ていて、もうひとつの副軸線が出来つつあるというイメージがあると思う。</li> <li>音楽学部棟、大学会館、資料館、図書館の雁行は、これもまた一つの軸としての塊と思う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>軸線は、キャンバスに秩序を与える存在。それによって分棟の欠点（棟ごとにばらばらに存在）を克服。</li> <li>軸線は、視線によって認識される存在。特に広場からの視線によって全体把握が可能。したがって、この視線が失われれば、軸線の存在が不明確になる。</li> </ul>	
眺望	<ul style="list-style-type: none"> <li>開学時には見えたかもしれない遠くの景色は、今では樹木の生長によって見ることができない。ただし、雑木林の手入れは必要であり、間伐すれば遠景が見える可能性はある。</li> <li>長鶴池は農業用溜め池として作られてものであるが、現在は水利権を持つ農家がこれを必要としているため、水は失われたままである。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>尾根に東西から入り込む沢は、それぞれ池に向かって開き、沢を通して、一方は瀬戸の山や遠く御嶽山が望まれ、一方には名古屋東山の市街が望見される。愛知用水ぞいの村道とグリーンロード（工事中）の小さいインターチェンジからゆるやかな丘を登ると、池に出て、校舎群が最初に目に入る。これらの景観を前提とした整備をおこなう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「間の空間」参照</li> <li>キャンバス内からのみならず、アプローチ景観を考えることが重要。</li> <li>樹木の精査によって剪定することで、全体的、遠景眺望の復活と確保が期待される。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「丘の上のキャンバス」であるためには、眺望が重要。</li> <li>「キャンバス内部から外の環境に続く視線」と運動。眺望の確保は、キャンバスに「ひろがり」を与える。</li> </ul>	
ブロック配置	<ul style="list-style-type: none"> <li>地形に沿って注意深くボリュームの配置がされている。むやみな高層化はせず、人が常に土や樹木に近いところにいるというのは、人と自然の関係を暗に説いているかのようでもある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>美術・音楽両学部ブロックは、丘の南の部分の東西両翼に一平面的な広がりを必要とする美術学部は開けた地形の西の翼に、集約する事の出来る音楽学部は、東の翼に池に面して一箇かれている。両学部を結ぶ軸と直交する軸に沿って、共通ブロックを配されていた。この配置計画に沿った将来計画を策定する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「分棟」「間の空間」「視線軸線」参照</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>地形の応じた配置だが、そこに秩序を確保するため、軸線との関係を考慮。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>西に美術、東に音楽という大きなブロックを維持すべき。</li> <li>全体の北部に建設予定の新音楽学部棟に対して、(法隆寺資料館を挟んで)美術の博士や芸術学の施設を配置するなどしては。</li> <li>逆に、将来音楽の管弦打や博士課程施設、コンサートホールなど全てが(新音楽学部棟周辺)北部に集中するのはバランスを崩すでの。</li> </ul>
規模算定	<ul style="list-style-type: none"> <li>開学後、博士前期後期課程の設置、陶磁専攻の新設などの改組があった。また、作品の大型化や表現方法の多様化など、既存空間でまかなえなくなっている。今後も学生数だけでなく、施設拡張の必要性が教育現場から叫ばれている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>個人指導を主体とする実技教育を重視した環境作りを目指す。</li> <li>お互いに影響し合いまとまり得るキャンバスの規模を維持し、今後の学生数の増大においても、キャンバスの構成を変えないことを旨とする。</li> <li>実技のための施設は、それぞれ最小限の広さが必要であり、他大学に比較すれば大きな面積を必要とすることを確認する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>当時の学生数や体系、行動規範や社会性から割り出されたものであり、現在的に問い合わせる必要はある。ただ、同一用途、同一形状空間である必要はないと思われる。コンバージョンにより生み出すことを優先して考えることは重要。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>設計当時の規模と現時点での規模に大きな違いがあるので、設計当初の規模算定を、現時点で批評するのは無意味。</li> <li>開学以後、現在に至る過程において、学生数と授業数が増加した時、その都度、必要な施設の検討がおこなわれるべき。それを怠ったとしたら、怠ったことを反省し、教訓すること。</li> </ul>	
地域に開かれた大学	<ul style="list-style-type: none"> <li>市民が活用できる施設は全て広場の南側にあり、講義棟の周辺は広場というよりアプローチになっている。今後、市民の利用が可能な施設を新たに建設する場合、この広場に接続された北側にその用地を見出すべきである。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>市民との接点を維持することに努め、市民が自然の中で憩い、野外で彫刻を観賞する公園とし、市民のためのオアシスとしての環境作りを目指す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「市民」を意識した設計思想がアプローチから講義棟、広場と資料館、そして奏楽堂の空間を、楽しめる、休めるそして学べるものとして計画された主体として認識できる。この近辺の市民への開放性がないと形だけの「開かれた大学」になってしまいそうである。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「キャンバスの庭に市民の姿も見られ、大学と市民の交流も行われている」「市民が自然の中でいい、野外で彫刻を鑑賞する公園」⇒市民がキャンバスに入ってくることを想定。その際、広場を使うことが前提。→広場に市民を引き込むことで、軸線・視線・眺望が認識でき、キャンバスを味わうことができる。→広場を維持すべき。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>立地上困難な部分もあるが、この場所だからこそその「良さ」を考えるべき。現状では「地域に開かれた大学」という観点ではまったく不十分である。</li> <li>大学全体の施設は勿論のこと、山、森林、キャンバスのグリーン、雑草にいたるまでの管理、日々の手入れのできる体制と予算を。「施設課」などが必要。</li> <li>また、建物とともに十分な駐車スペースの計画的な整備が必要。リニモとの関わりもよほど考えなくてはならないであろう。</li> </ul>
光・空気・音			<ul style="list-style-type: none"> <li>このキャンバスは、空間構成の中で自然との調和を重視していて、それがキャンバス全体の空気の流れと光の拡散、そして音の広がりを演出している。室内においてもこのことは重要視される必要があり、流れとしての環境要素をとらえてデザインされたことを評価すべきであろう。</li> </ul>		

### 3 平成 22 年度調査による植生区分図

これは、次年度行う予定の植生調査のために行った予備調査の結果をまとめた植生区分図である。優勢種が何であるかを目視により拾い上げたもので、大まかな遷移の状況は把握できるが、森の構成を明らかにするためには植生調査の結果を待たなければならない。しかしながら、開学当初の写真と現在のキャンパスの状態を比較すればその変貌ぶりは誰に目にも明らかであろう。原設計者の文献にもあるが、40 年前ここは松とツツジを中心とした低い樹木ばかりの貧しい山林であった。しかし、この 40 年間の間に遷移が進行し、松は枯れ、代わってコナラやアベマキといった落葉広葉樹が進出してきた。これら雑木は谷筋を伝って徐々に進行し、いまや風景の主役になっている。15m を超える雑木林の景観は我々に里山的な親和的イメージを与えるが、これらは遷移の過程の姿であり、林床には既に低い常緑樹が進出しており、世代交代できない雑木林はやがて消滅する状況にある。つまり、次の 40 年で風景は再び一変しているかもしれない。このように自然はダイナミックに推移している。ある状態を保とうと思えばそれは人が関与し、管理しなければならない。

自然の現在の状態、今後起りうる状況を科学的に把握し、それに対してどのように保全していくのかを選択しなければならない。例えば、すべて自然に任せ、遷移のまま変化してゆくべきであるという考え方もある。また、現在の雑木林の風景を維持したいという考え方もある。また、仮にどちらの立場であっても人が積極的に自然にアクセスできるようすべきという考え方もあるれば、立ち入りを制限すべきという考え方もある。このような異なる考えをエリアによって区分管理する方法もある。いずれにせよ、植生調査によって森の構造を明らかにしたうえで、保全、管理、利用についてのより具体的な計画を策定し、キャンパスマスタートップランに組み込んでいく必要がある。



#### 4 ビジョン検討会委員名簿／審議経過一覧

##### (1) 委員の構成

愛知県立芸術大学施設整備ビジョン検討会	
愛知県立芸術大学	学長（座長） 磯見 輝夫
	美術学部長・施設整備委員長 長谷 高史 ※
	音楽学部長 戸山 俊樹
	芸術教育・学生支援センター長 細川 修
	芸術創造センター長 天野 武子
	芸術情報センター長 寺井 尚行
	芸術資料館長 山本 富章
	音楽学部施設整備委員長 福本 泰之 ※
	美術学部施設整備委員 水津 功 ※
	事務局長 竹内 弘明 ※
愛知県公立大学法人	理事兼事務局長 金田 礼市※
	事務局次長 山田 正勝
有識者	奥村設計所（原設計者）奥村 昭雄 ※
	名古屋大学 教授 谷口 元 ※
	東京大学 名誉教授 香山 壽夫
	日本建築学会 東海支部長 堀越 哲美（名古屋工業大学教授）※
	DOCOMOMO Japan 西澤 泰彦（名古屋大学准教授）※
	芸大美術学部同窓会長 江口 倫郎
	芸大音楽学部同窓会長 茂田 勝
	芸大後援会長 森 克人
	芸大学生自治会委員長 横山 太郎（美術学部3年）
	愛知県 (オブザーバー)
	学事振興課長 長谷川 好喜
	公共建築課長 鈴木 雄二

注1 ※はビジョン検討会部会委員。

注2 奥村委員については、第8回ビジョン検討会においてビジョン検討会を「離れる」旨の宣言がなされた。

注3 横山委員については、伊藤祐基学生自治会代表代理（美術研究科博士前期課程2年）が出席した。

##### (2) 審議経過

	ビジョン検討会	ビジョン検討会部会
7月	11日（日）第1回 ・施設整備のコンセプト	
	15日（木）第2回 ・施設整備のコンセプト ・音楽学部棟の整備	
	26日（月）第3回 ・施設整備のコンセプト ・ゾーニング計画 ・音楽学部棟の整備	
8月	6日（金）第4回 ・議論のまとめと今後のスケジュール ・新音楽学部棟の建設場所 ・建物の概況と文化的価値に関する考察・評価	
	3日（金）第5回 ・新音楽学部棟の整備に対する奥村委員からの提案 ・今後の検討の進め方	
10月		1日（金）第1回 ・検討の進め方の確認
	21日（木）第6回 ・ビジョン検討会部会の設置 ・現キャンパスの評価の検討	
11月		7日（日）第2回 ・現キャンパスの評価検討 ・今後の検討内容について
	17日（水）第7回 ・現在のキャンパスの評価	17日（水）第3回 ・「現在のキャンパスの評価」のまとめ ・「将来のキャンパス空間の骨子」の検討
12月	17日（金）第8回 ・将来のキャンパス整備の方向性 ・『施設整備ビジョン報告書（仮称）』の内容 ・『施設整備ビジョン報告書（仮称）』の作成スケジュール	17日（金）第4回 ・将来のキャンパス整備の方向性
	18日（火）第9回 ・将来のキャンパス整備の方向性 ・主な建物の整備指針	18日（火）第5回 ・将来のキャンパス整備の方向性 ・主な建物の整備指針
1月	15日（火）第10回 ・キャンパスの整備方針 ・施設整備ビジョン報告書（案）	15日（火）第6回 ・キャンパスの整備方針 ・施設整備ビジョン報告書（案）
	1日（火）第11回 ・施設整備ビジョン報告書（案）	1日（火）第7回 ・施設整備ビジョン報告書（案）
3月	24日（木）第12回 ・施設整備ビジョン報告書（案）	